

懇話会当日の映写版：追って、金子先生にご確認を頂き、差し替えます。

19世紀のペルシアを旅した ヨーロッパの旅行家たち

ー バンベリー、ヘディン、サイクス、スタイン、カーゾン と、
明治前期の日本人の旅行記を中心に ー

第26回雲南懇話会
金子民雄

ご所蔵の稀観書より、関連の書影・図版 ほかの紹介
撮影と、スライド編集・調製：長岡正利

2013.10.1 東京市ヶ谷の JICA研究所にて
写真：イスファハーン「主のモスク(ブルーモスク)」／長岡、2012.7

19世紀～20世紀初頭におけるペルシアと周辺諸国の踏査記録

まず、ペルシアにおける 日本陸軍の情報収集活動 など：

明治前期の軍は広範な情報収集

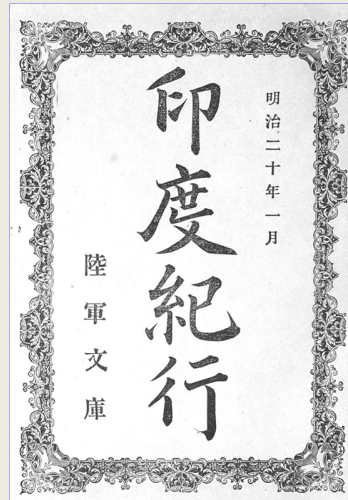
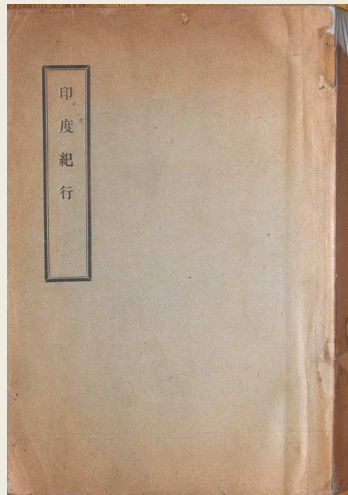
最初に、よく知られている 福島安正を

『単騎旅行 福島中佐遠征記 全』明治26(1893)年6月刊



ベルリンから内陸アジアを経てシベリアを単騎横断した旅行の冊子()の一部と、右は、晩年の福島(『福島將軍遺稿』(1941)より)。

『明治二十年一月 印度紀行』陸軍文庫、明治23年発行



この書にある、福島安正の全行程図を次ページに



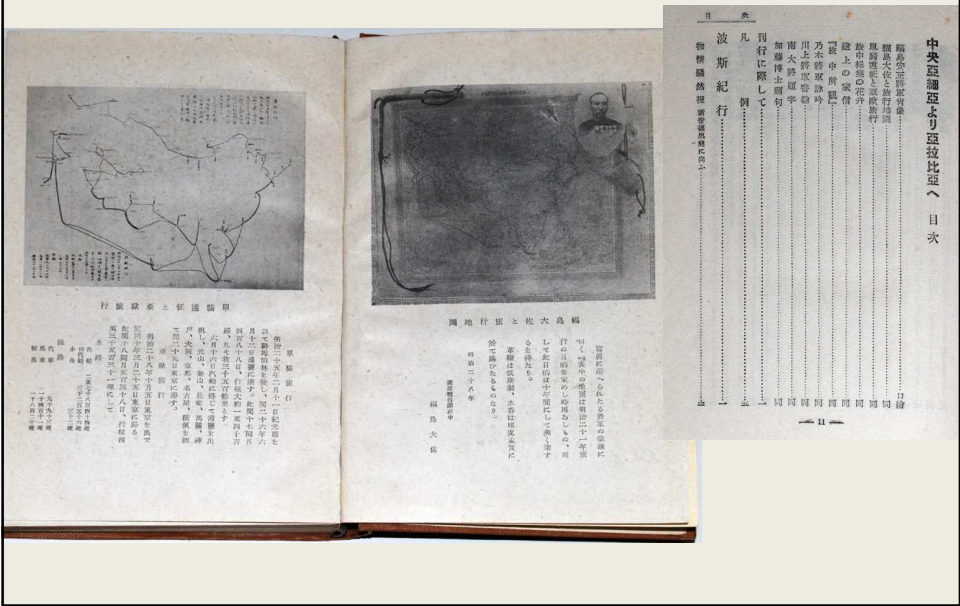
インドにおける福島安正の行程

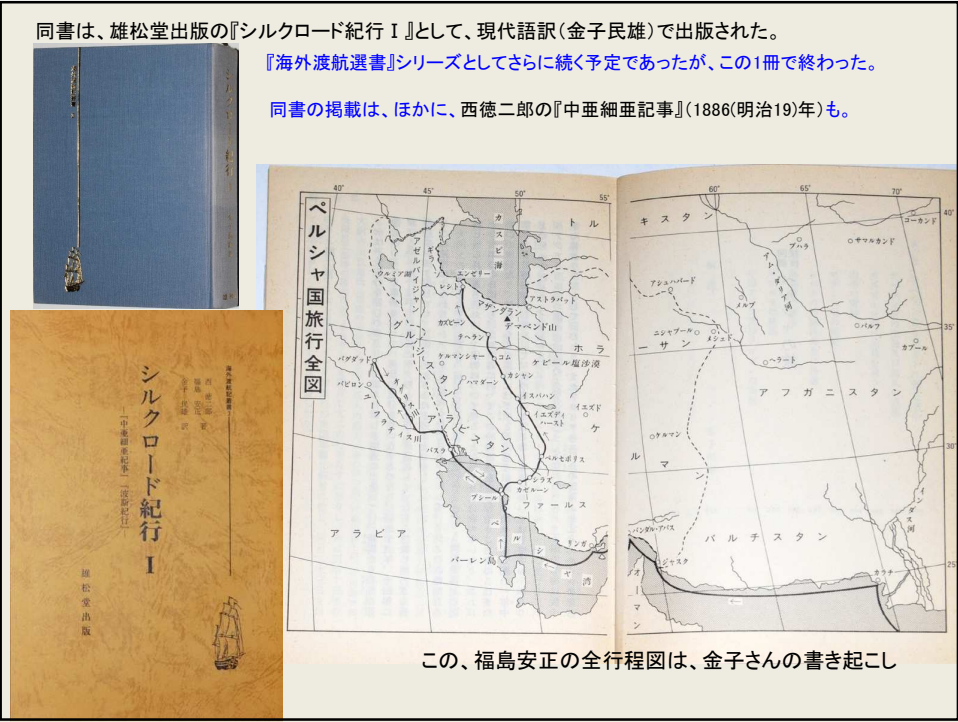
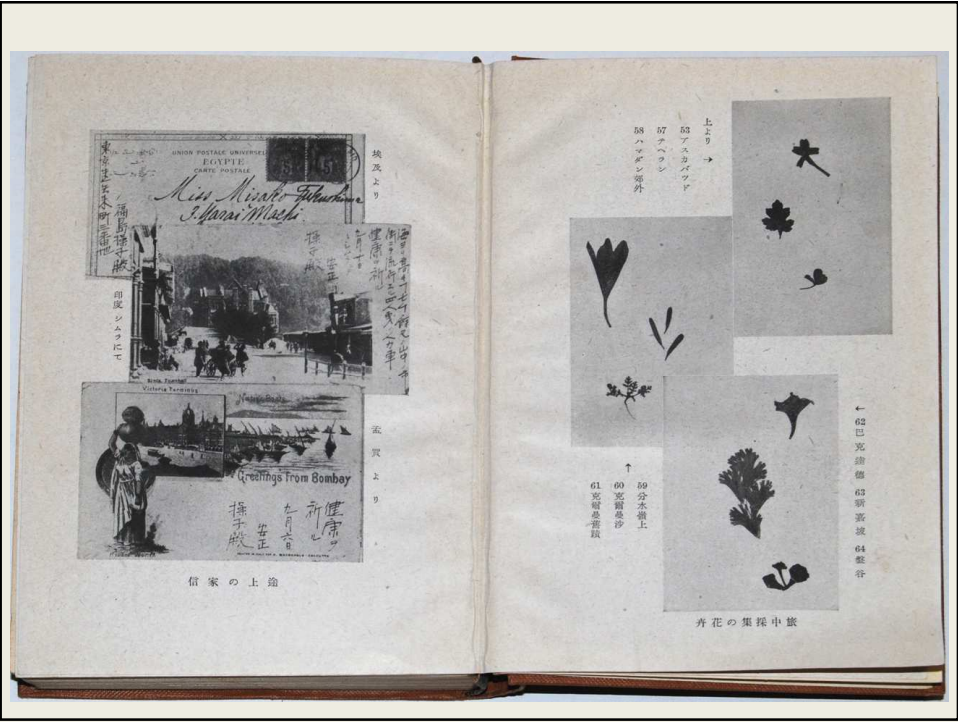
『中央亞細亞より亞拉比亞へ(福島將軍遺蹟 續)』福島安正(遺稿)、昭和18(1943)年刊



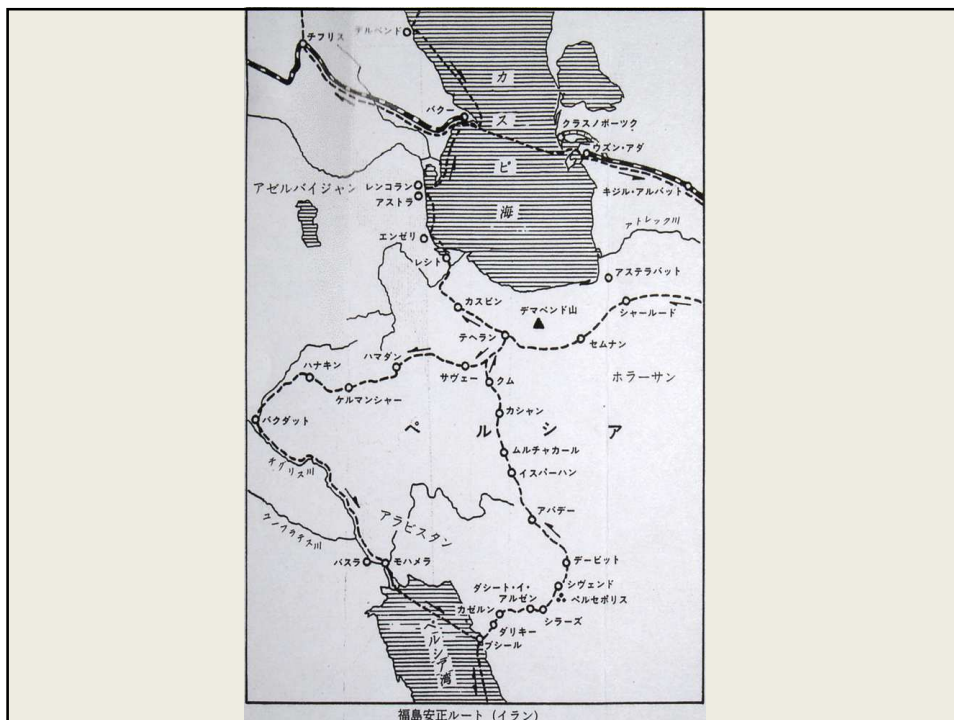
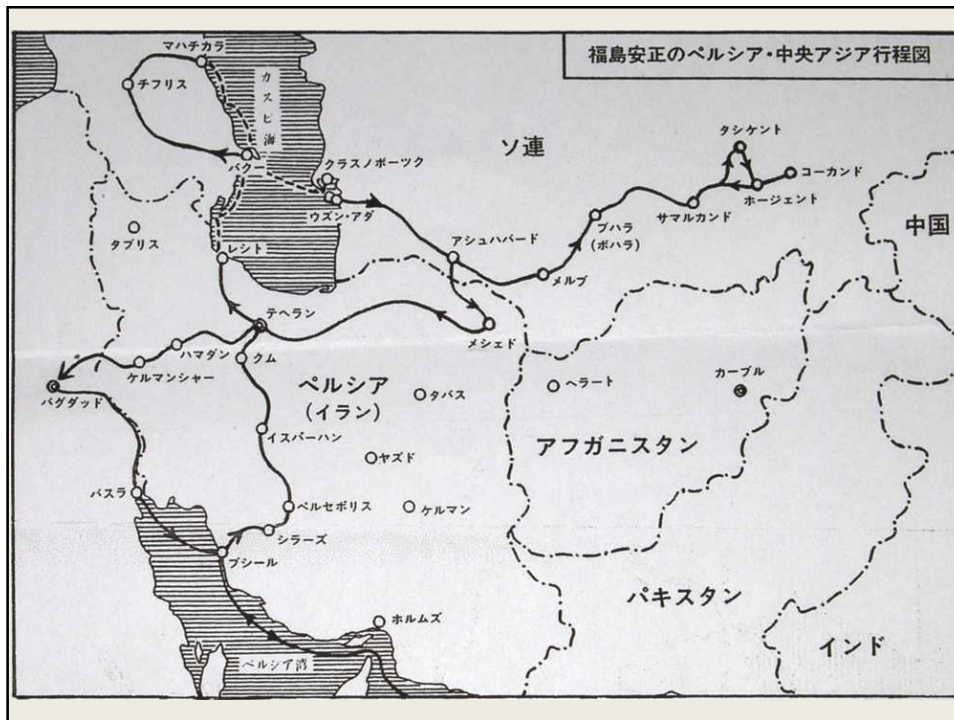
明治25(1892)年の「シベリア単騎横断」で名を馳せた福島安正將軍の遺稿をまとめたもの。
参謀本部の報告だったので、元本の完全稿本がない。これは、ほんの一部が発見されたもので、元本は不明。
(金子民雄さんによる。)

『中央亞細亞より亞拉比亞へ(福島將軍遺蹟 續)』福島安正(遺稿)、その内容





この、福島安正の全行程図は、金子さんの書き起こし





参謀本部からペルシア(波斯)への初の派遣者、陸軍工兵中佐・古川宣譽の報告書。

次に紹介の、吉田正春らとともに、明治13(1880)年、ペルシア(ガージャール朝)に派遣された。

「19世紀のペルシアを旅したヨーロッパの旅行家たち

ー バンベリー、ヘディン、サイクス、スタイン、カーゾン と、明治前期の日本人の旅行記を中心に ー

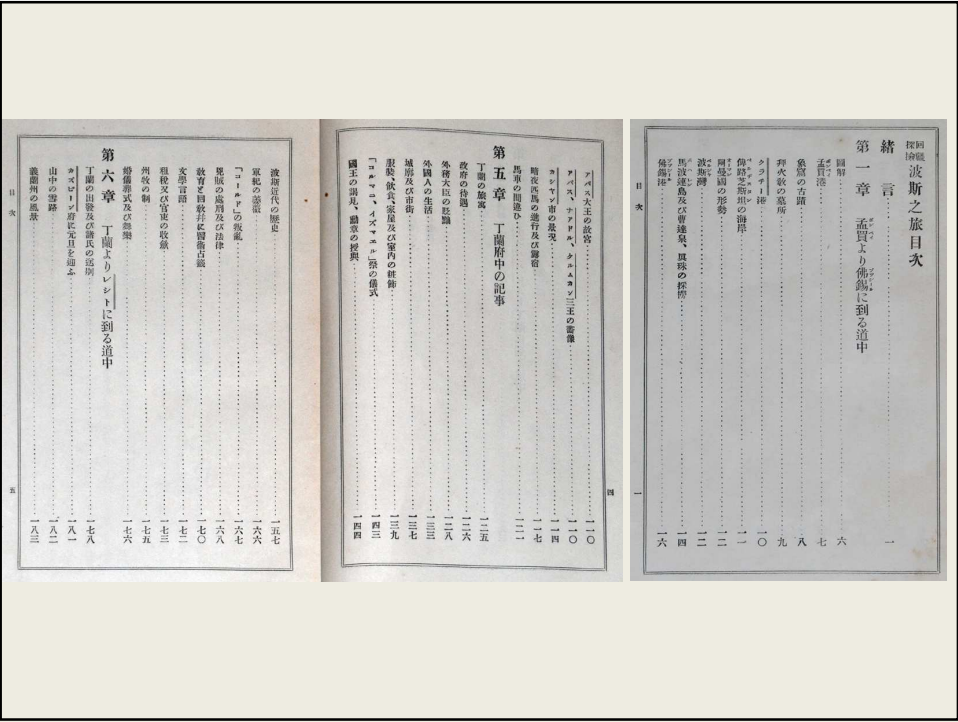
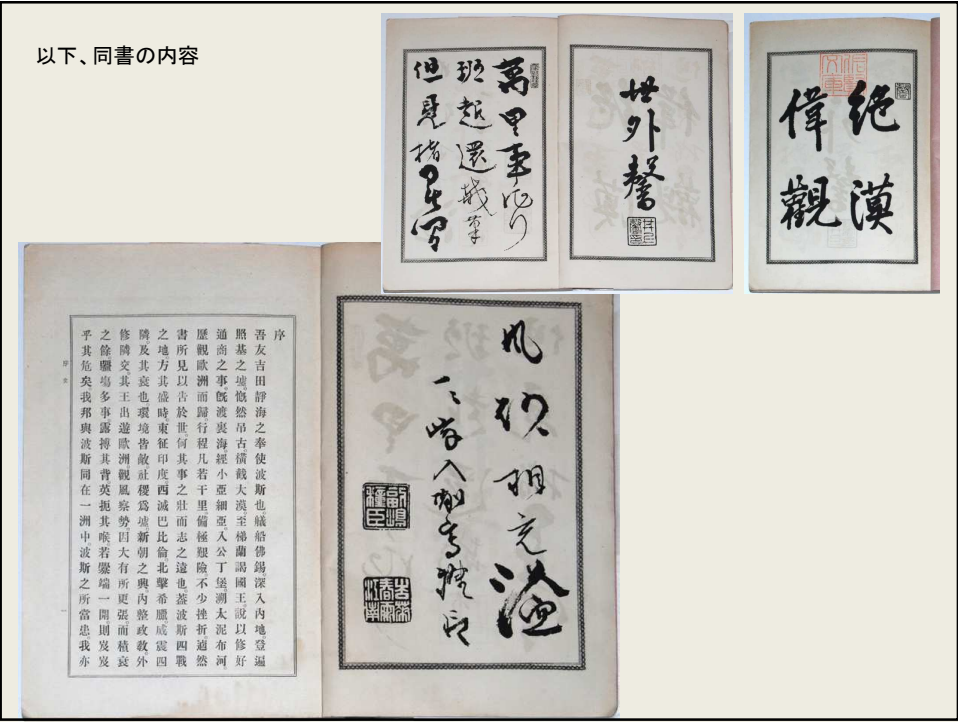


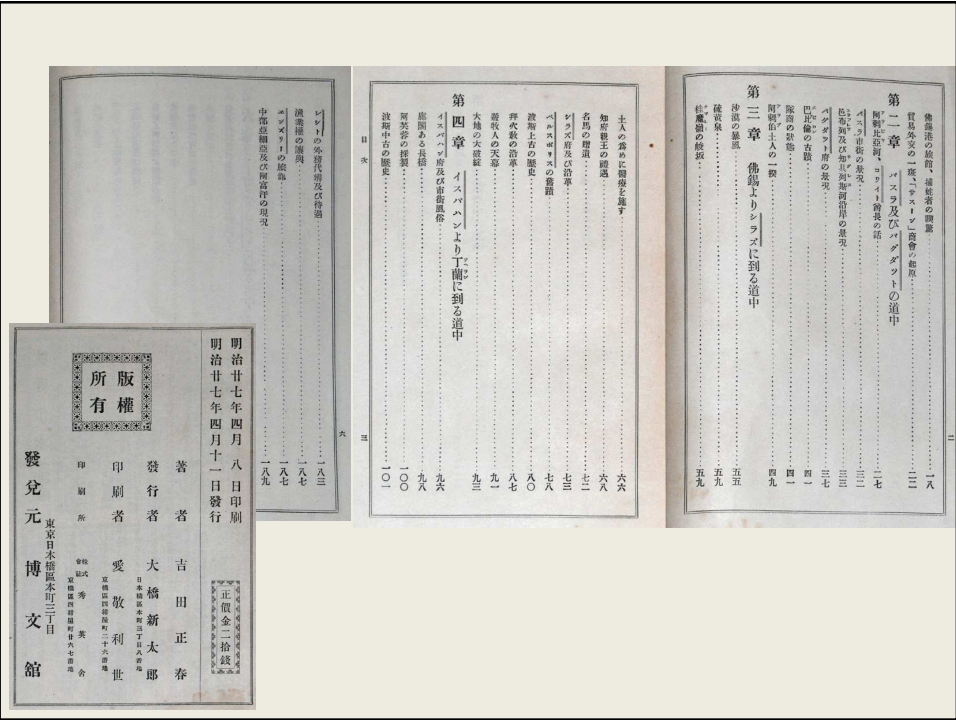
同書の挿絵より



同書より、吉田正春による明治13～14年の旅程。

この書の現代語版が、中公文庫に(左)。金子民雄さんが解説。



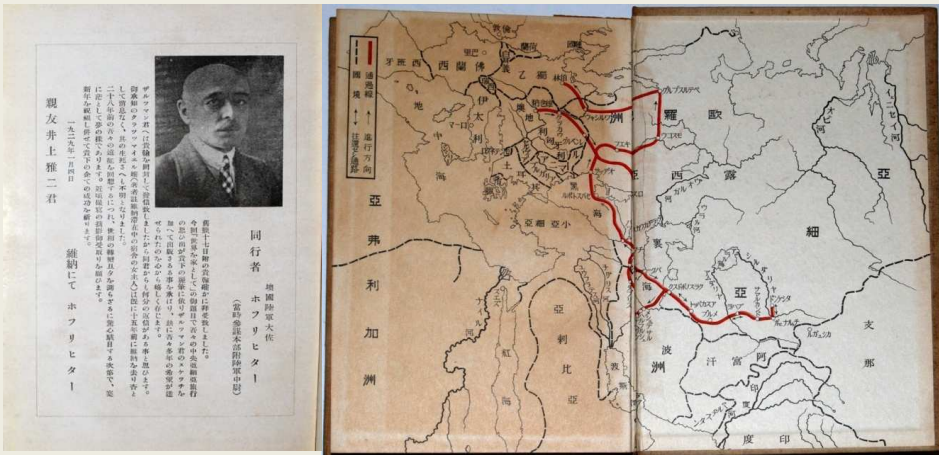


『世界を家として－偉人と山水』井上雅二、東京博文館、昭和4(1929)年

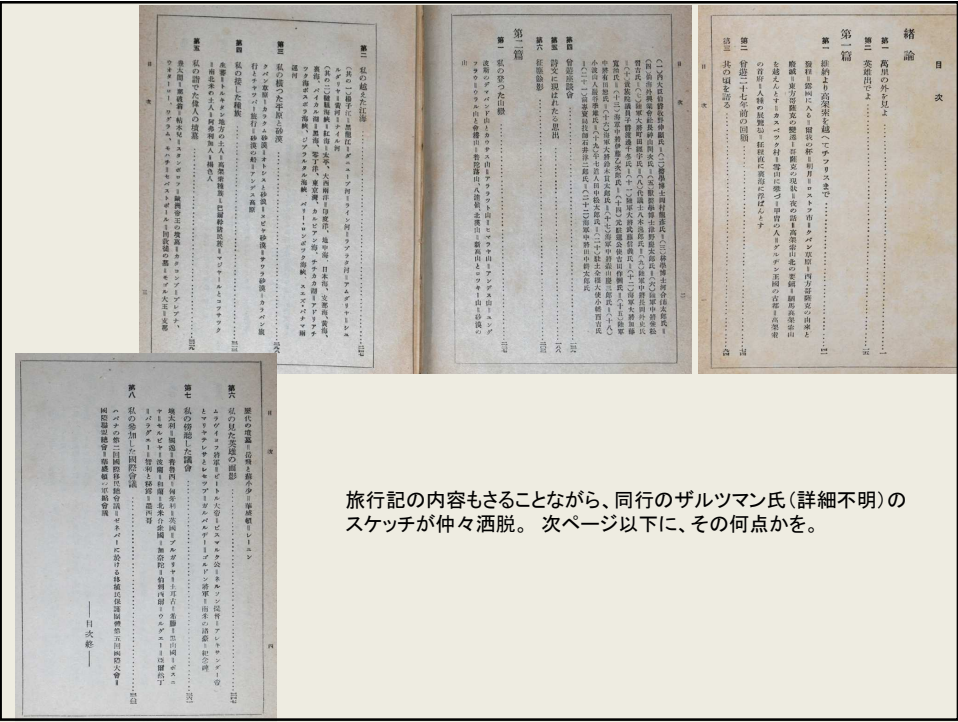


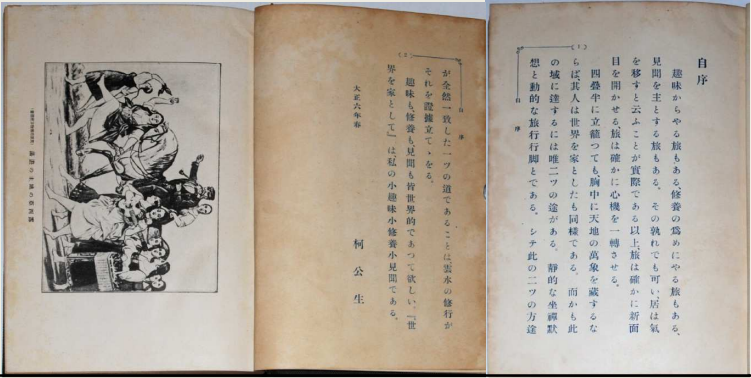
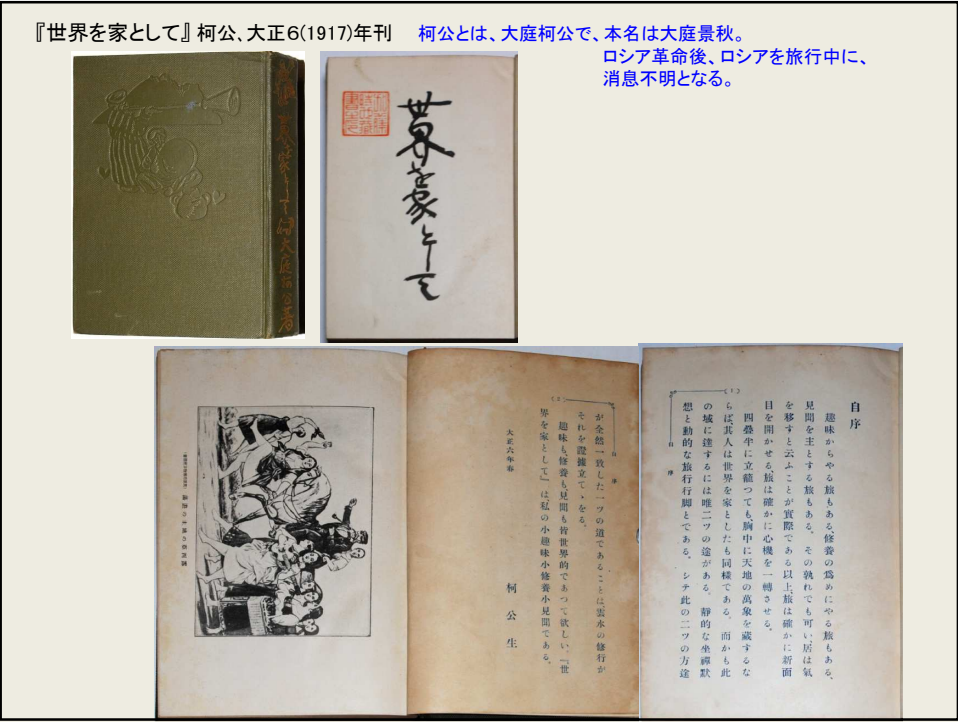
井上雅二：1877.2.23兵庫生まれ。海軍兵学校に学び、1899.6東京専門学校英語政治科卒。1904.3通信省韓国地況調査を囑託され、東亜同文会の一員として中国に渡る。1904.10朝鮮日日新聞社長、1905.9韓国政府財政顧問附財務官、1906.2水原政府財政顧問支部在勤、1906.10光州政府財政顧問支部在勤、1907.8政府財政顧問本部総務部勤務、1907.11～09.12宮内府書記官、1911.10南亜公司常務取締役、1915.1南洋協合理事、1920.11南洋協会専務理事、1924.3海外興業株式会社取締役社長、1924.5衆議院議員、1926.6秘露綿花株式会社社長。1947.6.23死去。

(以上、国立国会図書館「リサーチ・ナビ」による。)

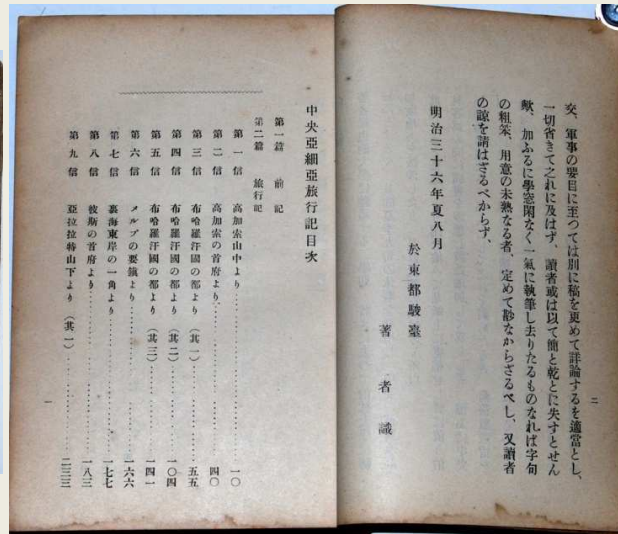
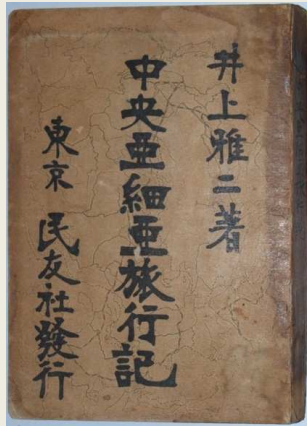


井上の旅行には、当時、参謀本部附陸軍中尉であった、オーストリア国軍人ホフリヒターが同行した。上は、この書の出版時(1929年)に同国の陸軍大佐となっていた氏が巻頭に寄せた文。





『中央亞細亞旅行記』井上雅二、東京民友社、明治36(1903)刊（前に紹介の『世界を家として』と同じ著者。）



ヨーロッパから
中央アジアへの
行程図



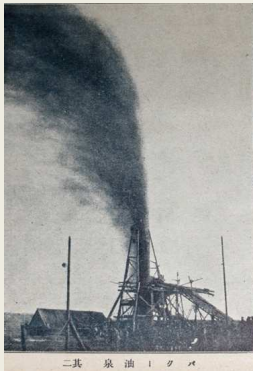
その、中央アジアでの行程

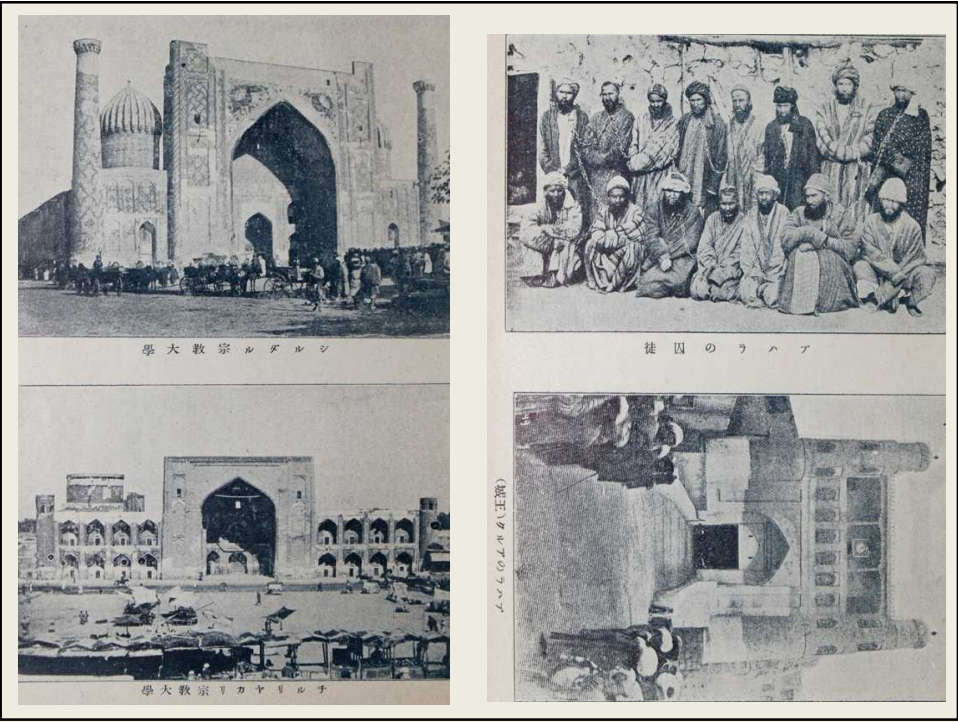


イラン国内は、カスピ海東岸のクラスノボトスクから南下して、テヘラン、ガズビン、タブリーズを経て、コーカサスを越えてヨーロッパ(モスクワ)へ。



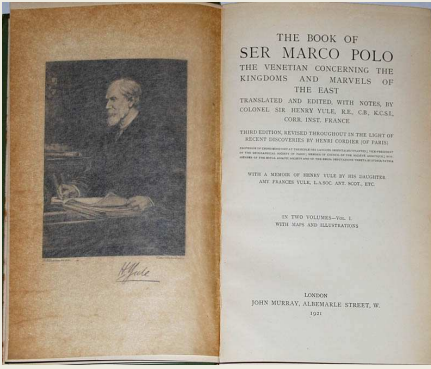
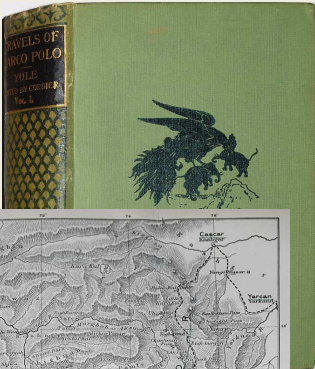
コーカサス山中の険路と、バクー油田の自噴・火災事故。





続いて、この地域での話題として、
マルコポーロ(ヘンリ・ユールが欧米で紹介)のたどった道と、
関連して、オマルハイヤームの『ルバイアート』ーその関連の地図も

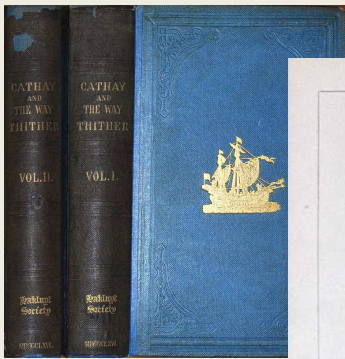
日本では、
『東方見聞録』



**H. Henry Yule (訳・編集)による2巻本、
The Book of Ser Marco Polo – The Venetian
Concerning the Kingdoms and marvels of the East
2 vols, Vol. I cii+462p, Vol. II xxii+662p. London 1921**

残念ながら、同所にはペルシア周辺の地図図はない。
左は、ワハーンを越えて、中国へ入る辺り。

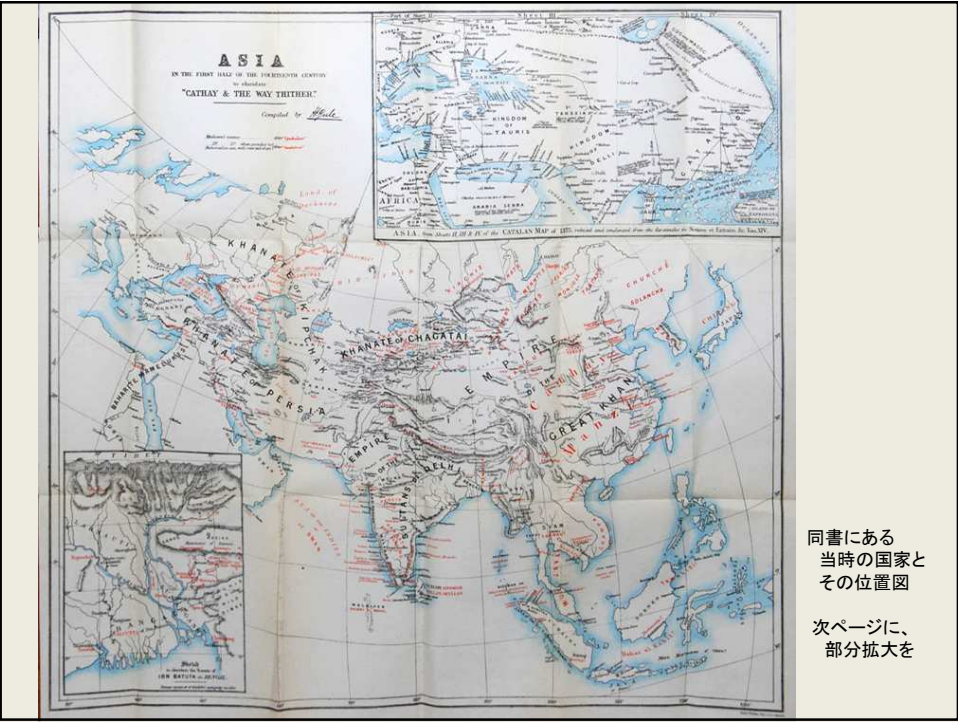
『Cathay and the Way Thither—Being a Collection of Medieval Notices of China』
H.ユール訳著、1866年刊 London



**CATHAY
AND THE WAY THITHER;
BEING A COLLECTION OF
MEDIEVAL NOTICES OF CHINA,
TRANSLATED AND EDITED
BY
COLONEL HENRY YULE, CB.,
LATE OF THE ROYAL ARMY MEDICAL DEPARTMENT.
WITH A
PRELIMINARY ESSAY
ON THE INTERCOURSE BETWEEN CHINA AND THE WESTERN NATIONS
PREVIOUS TO THE DISCOVERY OF THE CAPTIVITY.**

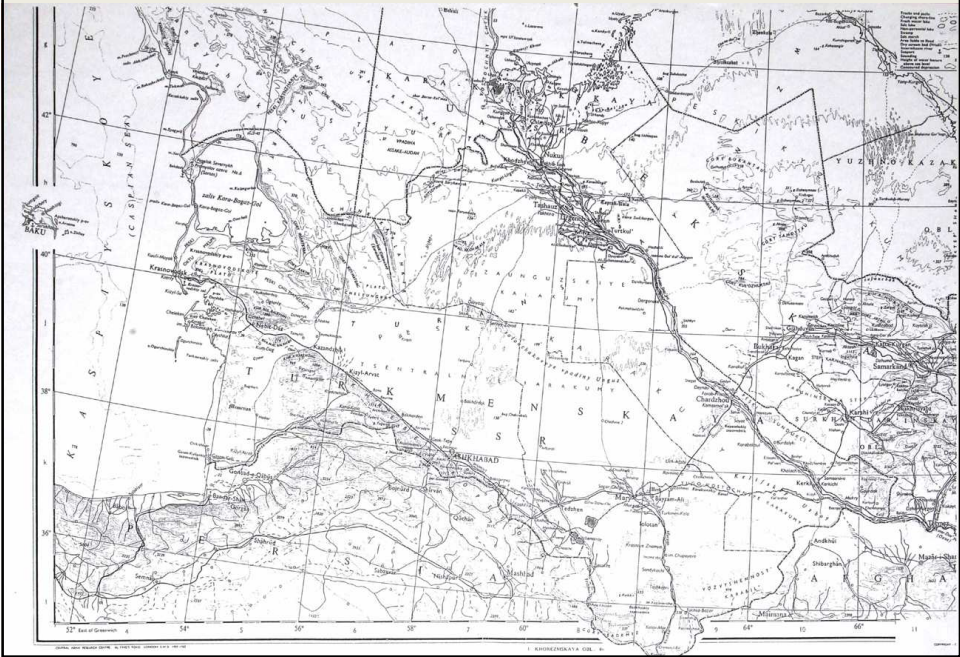
VOL. I

**LONDON:
PRINTED FOR THE HARLETT SOCIETY.
1866.**



ペルシア東部における、オマルハイヤームに関連する地域・地名

図中の説明は、金子さんによる。



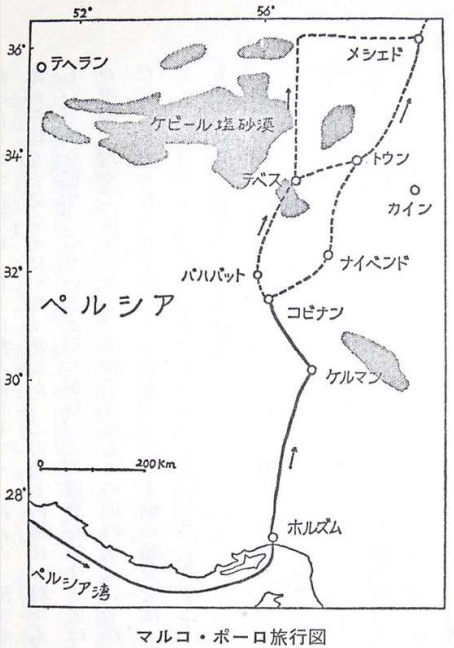
【ご参考】

アレクサンダー大王の遠征経路とそのアレクサンドロス帝国の最大版图



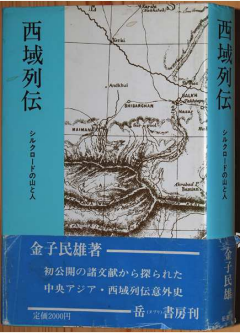
【英版ウィキペディアより。】

遠征帰路でのアレクサンダーの死後、帝国は分裂して、この一帯はセレウコス朝シリアに。
一方では、ローマ帝国の勃興と繁栄。



金子さんによる
ペルシアにおけるマルコポーロの
行程経路についての、諸説一覧

『西域列伝』金子民雄、2007 岳書房 より



ルバイアートのたくさんの書影・図版は、最後の長岡スライドショーにて：ここではとりあえず、スライド1枚を



写真は、最後の長岡スライドショーにて：ここではとりあえず、スライド2枚を



今のイランにあるものは、出土品のために、このような。正倉院蔵の白瑠璃碗。左と同じ製品。(正倉院HPより)



現代のガラス器。ワイングラス？

クルシアナ クリサンタジェム
Glusiana Chrysantha Tub Gen



原種系チューリップ:「花とべんけい」HPより



写真は、最後の長岡スライドショーにて

チューリップと並んで有名な、
けし(芥子)の花

デマバンド山麓にて



写真は、最後の長岡スライドショーにて

イスファハーン、庭園博物館の

チェヘル・ソトーン宮殿(17世紀)
壁面を飾る伝統的なペルシアの絵。

下は、当時のオランダから招かれた
画工による絵。



現代のイスファハーンで見た壁画



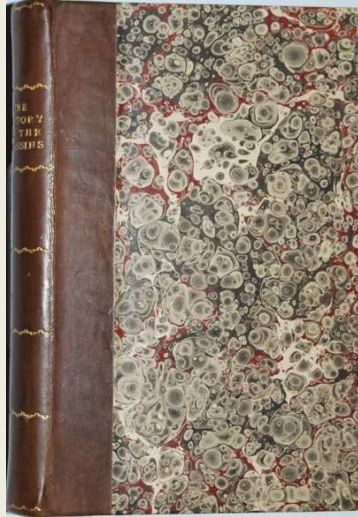
「19世紀のペルシアを旅した ヨーロッパの旅行家たち

ー バンベリー、ヘディン、サイクス、スタイン、カーゾン と、明治前期の日本人の旅行記を中心に 」

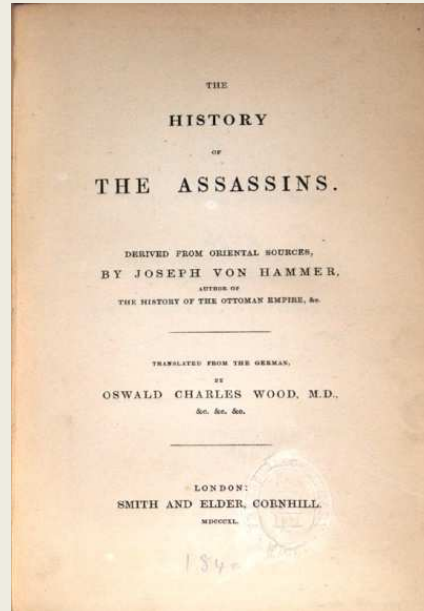
ペルシアを中心とした暗殺者教団

『暗殺者教団の歴史—東洋の伝承』 Joseph von hammer、1818年刊：

Oswald Charles Wood 英訳、1840年刊



金子さんコメント：珍しい本。綺麗な装丁だが、
初版本は多分、仮とじ本であった。



暗殺者教団の根拠地、
アラムートの現在と、近くの人たち

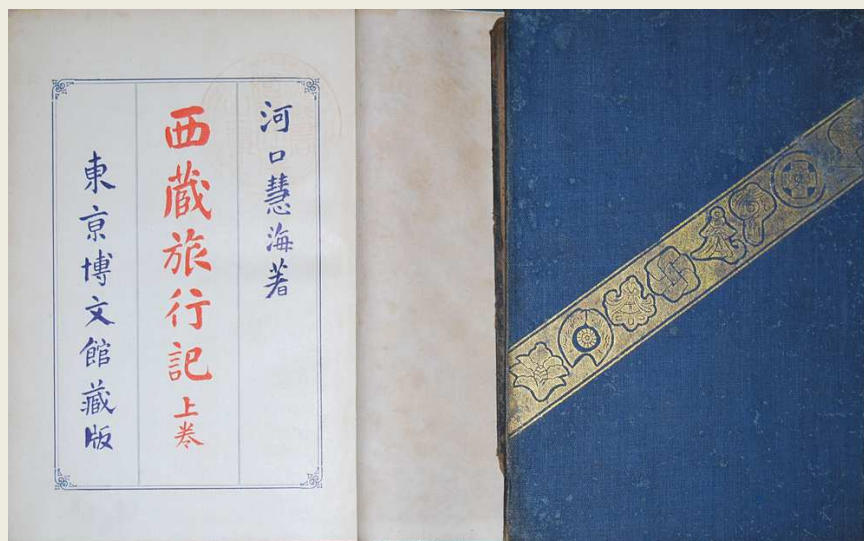


写真は、最後の長岡スライドショーにて



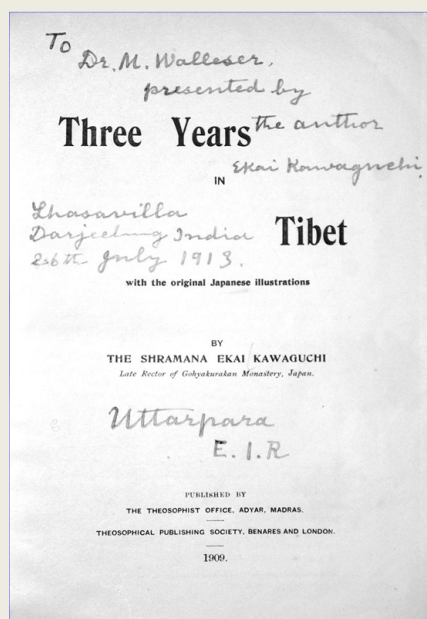
【ご参考】

福島安正が間接的に関係した、河口慧海

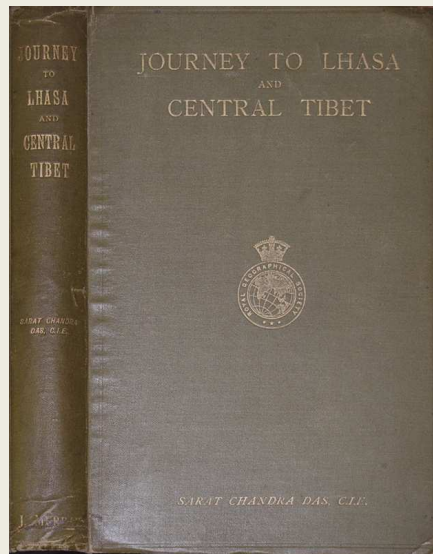


福島の印度旅行 → そこで逢った英国高官とペルシアで再会 → 福島はチベットへ入りたかった →
→ その西藏へ河口慧海が → 河口は気づかなかったが、英はスパイとしての価値視 → 河口からの
S.C.ダスあて手紙を利用。... → ヤングハズバンドのチベット侵攻 (金子さんによる。)

河口慧海『西藏旅行記』の英語版、1909年にインドで出版



同書中の、河口慧海



【ご参考】

ペルシア絨毯と、イスラム庭園



イスファハーンの、緑が豊かなハーフェズ廟。

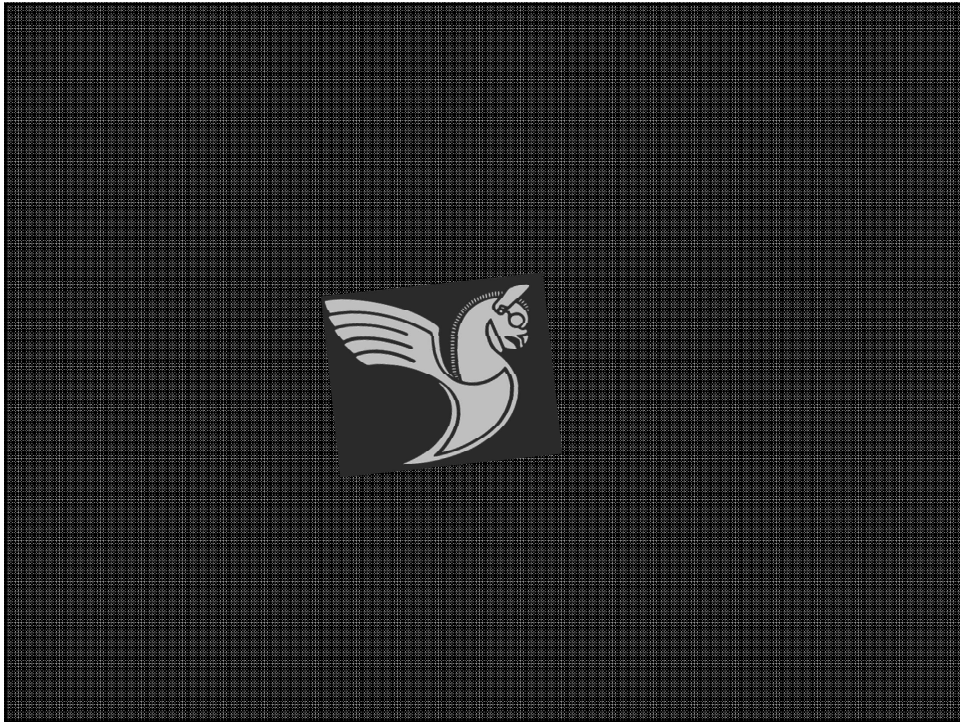
写真は、最後の長岡スライドショーにて



国立絨毯博物館 500年前以降の絨毯を多数展示。



スリナガルのシャリマール庭園 (シャージャハーンによる)



19世紀～20世紀初頭におけるペルシアと周辺諸国の踏査記録

ー 中央アジアの覇権を巡って英露がしのぎ削っていた時代の、踏査などの報告書に見る 当時の状況。

ご紹介は、順に、

- ・ S. ヘディン
- ・ ヴァンベリー
- ・ マルコポーロを紹介した、ヘンリ・ユール（既にご紹介済み。）
- ・ サー・パーシィ・サイクス
- ・ パーシィ・サイクスの妹の、エラ・サイクス
- ・ 最後に、当時の探検家の活動に大きく寄与した インド総督(副王)、カーゾン卿
その前半人生での、探検家としてのカーゾンについても言及。

ペルシアにおける S.ヘディンの事績

最初のペルシア旅行は、
ノーベル族が経営するバクー油田(カスピ海西岸)技師の家庭教師として招かれ、半年で仕事を終えて、ペルシア人仲間と、テヘランの南へ旅行。戻って、バクーからトルコ経由で旅行し、帰国。(1885～86年)
紹介は、この調査行についての、ヘディン最初の報告書。
ブダペストで H.バンベリーに会う。バンベリーがこの前書きを。



この書の冒頭にある
ナスール・エッ・ディン
ペルシア皇帝(シャー)
旅行に便宜を頂いた。



『ペルシア、メソポタミア、コーカサス横断
旅の思い出』

スヴェン ヘディン
ヘルマン・バンベリー教授の序文

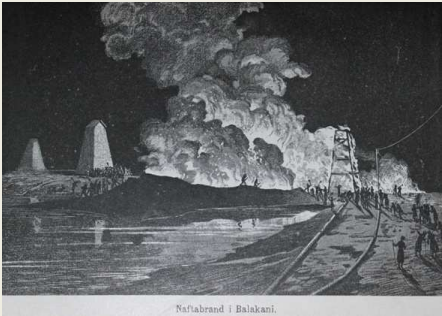
128図版と地図2葉

ストックホルム
(1887年 刊)

【ご紹介文献などは、これ以降を含めて、金子民雄さん蒐集のもの。その内容説明も、同様。】

この書の扉(表題紙)より

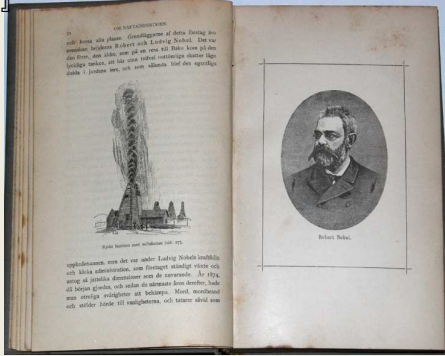
『ペルシア、メソポタミア、コーカサス横断ー旅の思い出』
S.ヘディン、1887 より、図版の紹介



Nafibrand i Balakani.



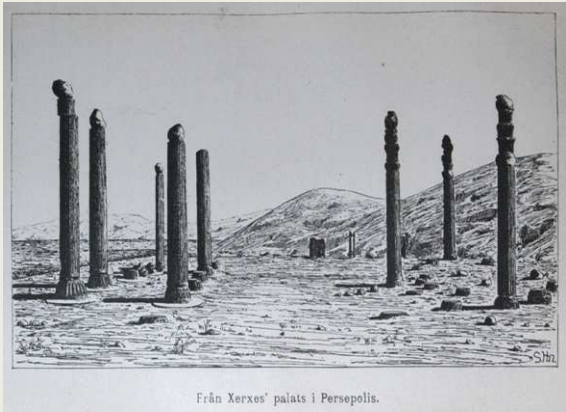
Skuter i Krasnowodskas hamn.



ダイナマイト発明で巨万の富を築いたアルフレッド・ノーベルは、「ノーベル兄弟石油会社」を設立して、バクーで油田開発。
上は、同書中のロバート・ノーベルと、油井の自噴。

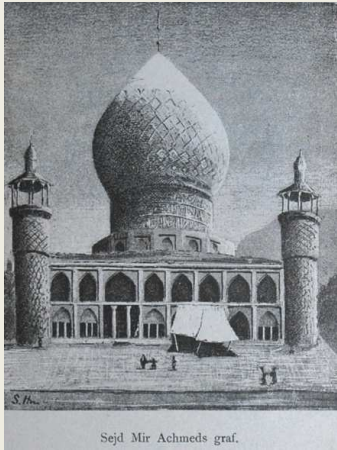
左上：豊富な埋蔵は、自噴とともに火災の原因ともなっていた。

カスピ海を隔てた、バクーの対岸クラスノボドスクの港泊地。
タシケント方面への起点。(現・トルクメンバシ)



Från Xerxes' palats i Persepolis.

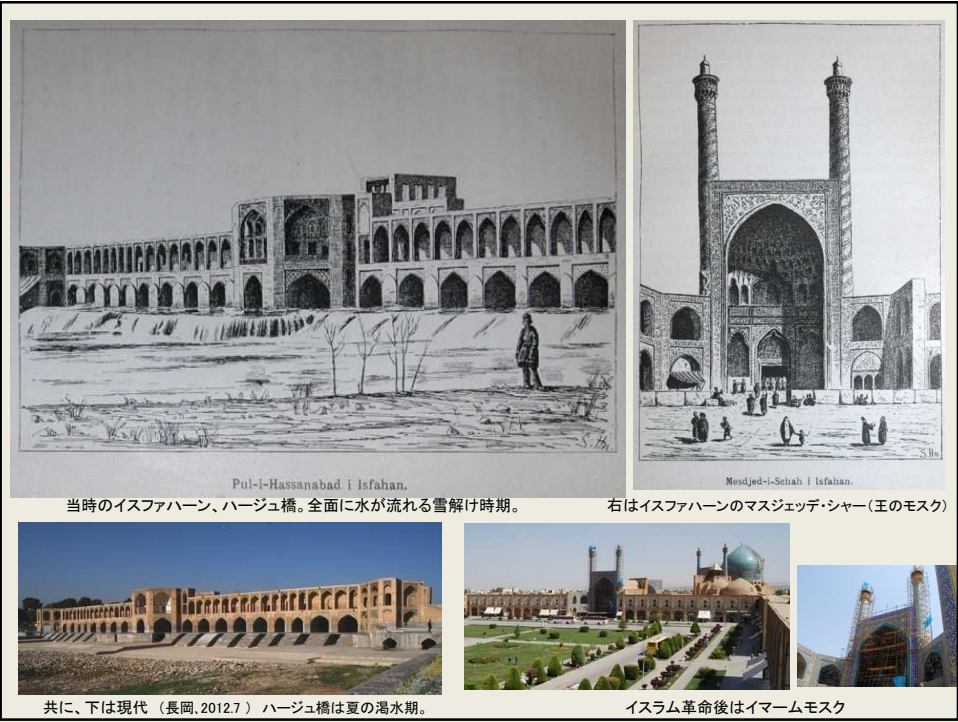
当時の、列柱が少し残っていたペルセポリス遺跡
下は、現代 (長岡, 2012.7)

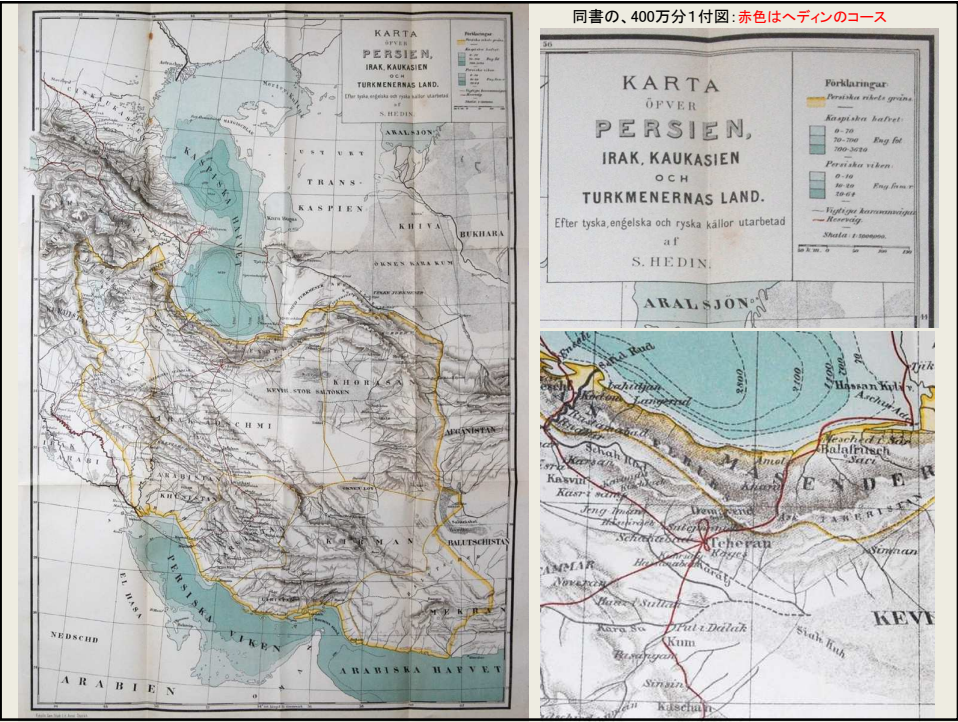


Sejd Mir Achmeds graf.



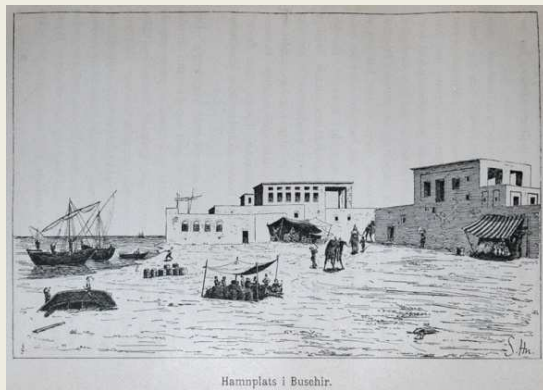
セイド・アフメド(シャー・チェラグ) 廟
下は、その現代
(シラス・ホマ・ホテルのパンフより)





「19世紀のペルシアを旅した ヨーロッパの旅行家たち

ー バンペリー、ヘディン、サイクス、スタイン、カーゾン と、明治前期の日本人の旅行記を中心に ー

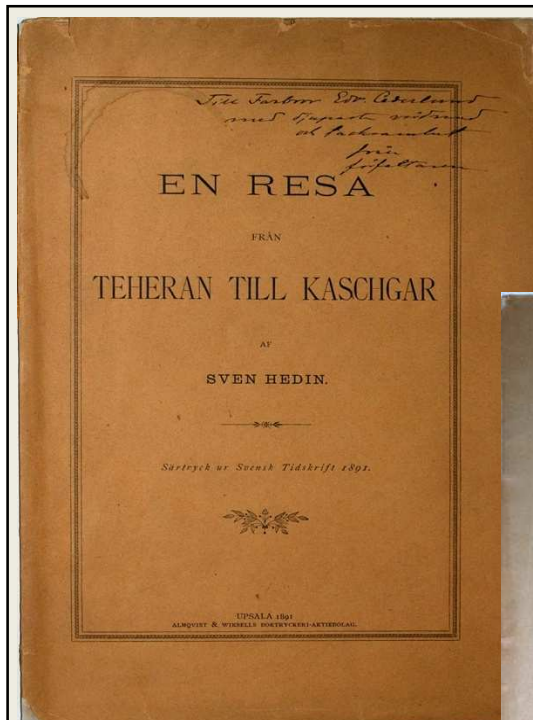


ペルシア湾に面したブシェールの港（現在は、原発立地で知られる。）



右上：ヨーロッパに続くイスタンブールのガラタ橋。

下は、ヘディンによる「トルコの夫人」スケッチ。
その後の著作にも、人物スケッチが多く載せられる。



『テヘランからカシュガルへ』S.ヘディン、1891

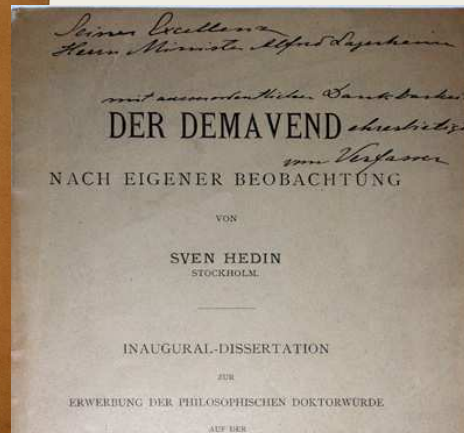
スウェーデン王オスカル2世がペルシアに派遣した 使節団の随員(通訳)として訪問。任務の後、単独で、メルヴ、ブハラ、サマルカンド、カシュガルなどを旅行(1890-91年)。

後の報告書の予報的内容。

ベルリン大学(リヒトフォーヘン教授)留学の後、ハレ大学での学位論文のもとになったのが、左の論文。(金子民雄さんによる。)

下：ヘディンの博士論文『デマバンド』

ペルシア訪問で皇帝の知遇を得、勧めによって、デマバンド山へ。それを契機としてまとめたもの。



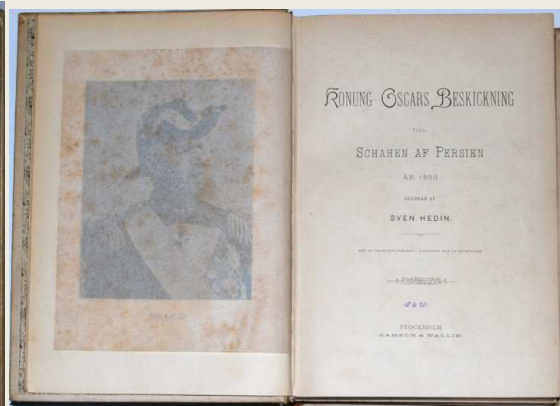
「19世紀のペルシアを旅した ヨーロッパの旅行家たち

ー バンベリー、ヘディン、サイクス、スタイン、カーゾン と、明治前期の日本人の旅行記を中心に ー

『1890年、オスカー国王よりペルシア皇帝への公使派遣』S.ヘディン、1890

ヘディンによる使節団の報告書。

内容は、使節団のこのことのみで、そのあとのヘディンの旅についての記述はない。この本は、スウェーデン語のみで、ほかの多くのように、ドイツ語版はない。



見開きの左に、スウェーデン国王の写真
(次スライドに。)



OSCAR II.

スウェーデン国王 オスカー二世



Nasr-ed-Din. schah af Persien.

ペルシア皇帝(シャー) ナスール・エッ・ディン

同書より、図版の紹介



Darius och hans nio upproriska vasaller.
Relief vid Bisutun.

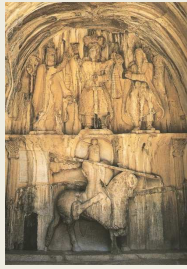


Konung Schapur, relief i Tag-i-Bostan.



現代のダリウスー世戦勝記念碑 (ペルシア語版ウィキペディアより)

上右の、現代の姿 (英版ウィキペディアより)
イラン西部ケルマンシャー近郊の、ササン朝
ターク・イ・ブスタン (Taqi-Bustan) 遺蹟。
ホスロー2世が、両側の神々から王権を授与
される様子を描く。



当時のテヘラン。



Teherans östra stadsdel.

現代の緑豊かなテヘラン
公園など、緑豊かな地区も。



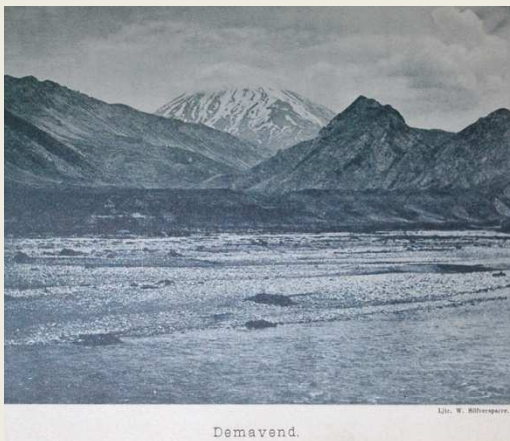
「19世紀のペルシアを旅したヨーロッパの旅行家たち

ー バンベリー、ヘディン、サイクス、スタイン、カーゾン と、明治前期の日本人の旅行記を中心に ー



当時の、テヘランの商店街での人々。

下は、現在のテヘランでの
普通の商店街と、昔からの市場(バザール)。



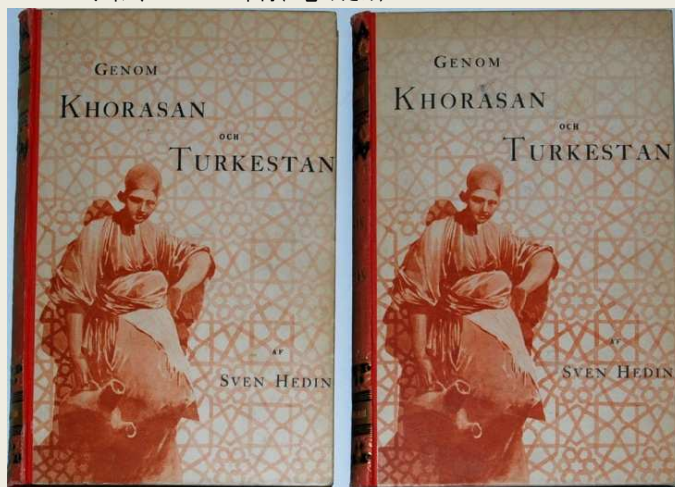
左：ヘディンが見たデマバンド山と、その現在の姿(上)
(前記：ヘディンの博士論文の対象地)

右：拝火教徒の「鳥葬の場」。1930年代の禁止まで使われた。
下は、その現在。(『地球の歩き方 イラン ペルシアの旅』2011 より。)

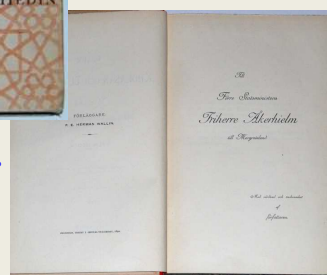


「19世紀のペルシアを旅した ヨーロッパの旅行家たち

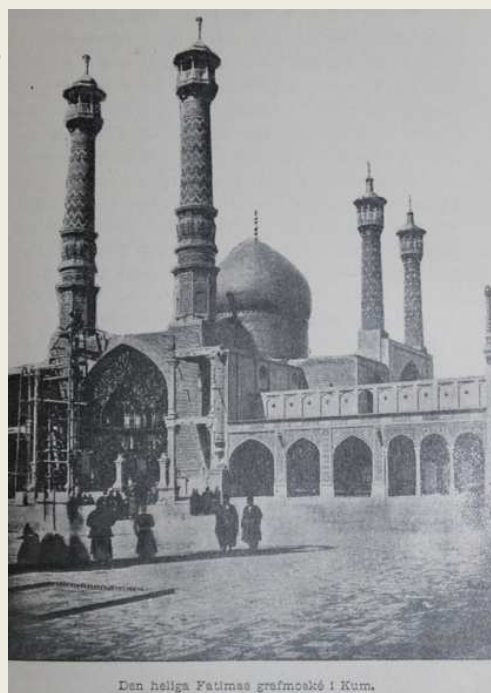
ー バンベリー、ヘディン、サイクス、スタイン、カーゾン と、明治前期の日本人の旅行記を中心に ー

『ホラサンからトルキスタンへの旅ー1890、1891年の中央アジア旅行の思い出(回想)ー』
S.ヘディン、1890・1891年刊(2巻のため)

この書の副題「1890、1891年の・・・」は、扉(表題紙)に。

続く見開き(左)には、発行者・ストックホルムのF.E.Hermann
右には、行政官(政治家)・T.Akerhielmへの献呈。左: コムのFatima Masumeh Shrine
12イマーム派第8代イマーム・レザーの妹、ファティマの廟
(シーア派の聖地)

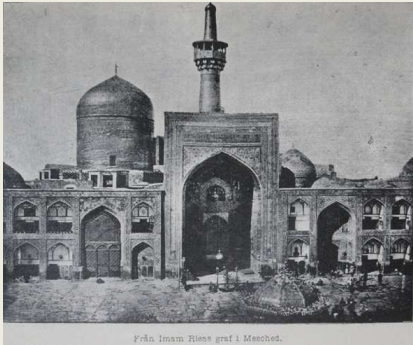
その現在。(英版ウィキペディア より)



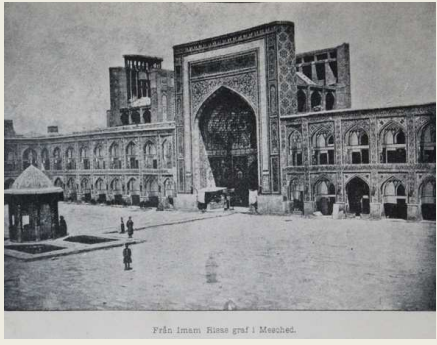
マシュハド(メシェッド)のモスクなど



Imam Reza grafmoše i Mešhed.



Från Imam Reza graf i Mešhed.



Från Imam Reza graf i Mešhed.

ヘディンの著作には、その初期から、人物画スケッチが多く登場

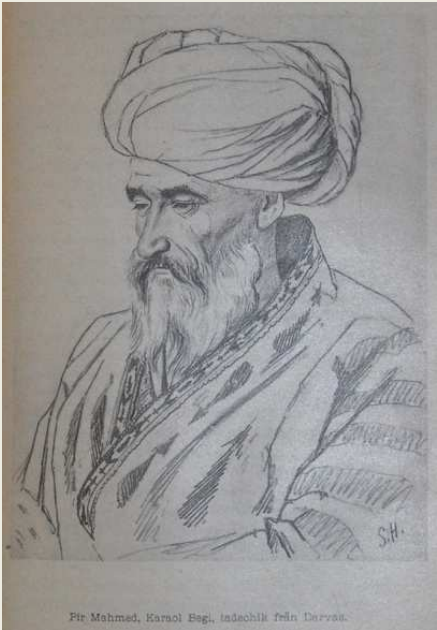


Kader Khan, sart (Kashgar).

Tahir Achun, sart (Kashgar).

Muhammed Karim,
sart, skandai i At-Baschi.

Sartak divanah eller Gervisch
i Teshiraktezhi (Bukhara).



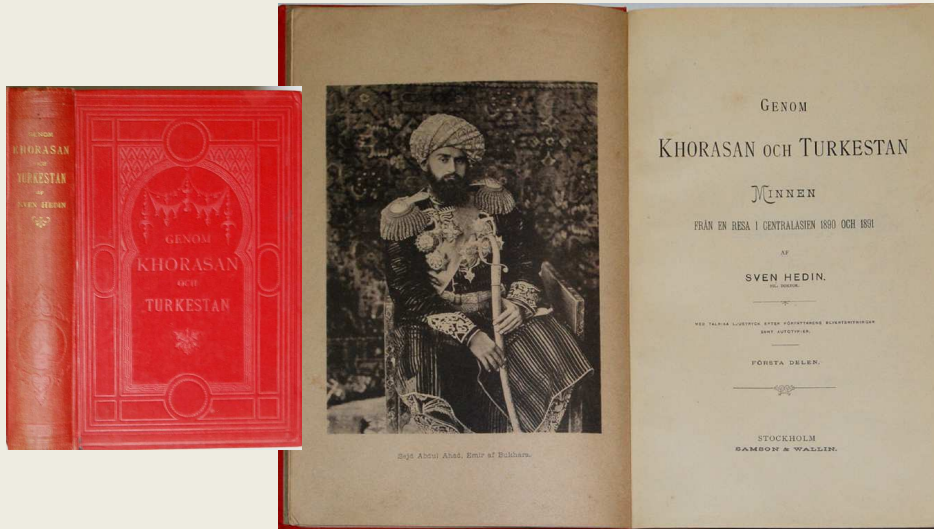
Pir Mahmed, Karzol Bagl, Indachik från Dervaa.

「19世紀のペルシアを旅したヨーロッパの旅行家たち

ー バンペリー、ヘディン、サイクス、スタイン、カーゾン と、明治前期の日本人の旅行記を中心に 」



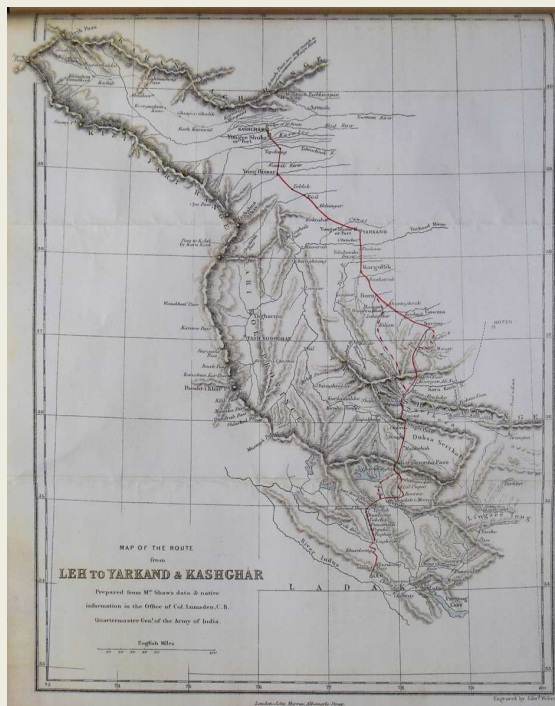
『ホラサンからトルキスタンへの旅ー1890、1891年の中央アジア旅行の思い出(回想)ー』
S.ヘディン、1892年刊 ー 同名の、1890・91年刊の2巻本を1冊にまとめたもの



左は、ブハラのエミール(藩王)、
アブドゥル・アハッド

同書の附図
「レー から ヤルカンド、カシュガルへの
ルートマップ」:基図はインド陸軍

カルドン・ラ と カラコルム峠を越える
ルートが示されている。



次ページで図の下半部の拡大を。

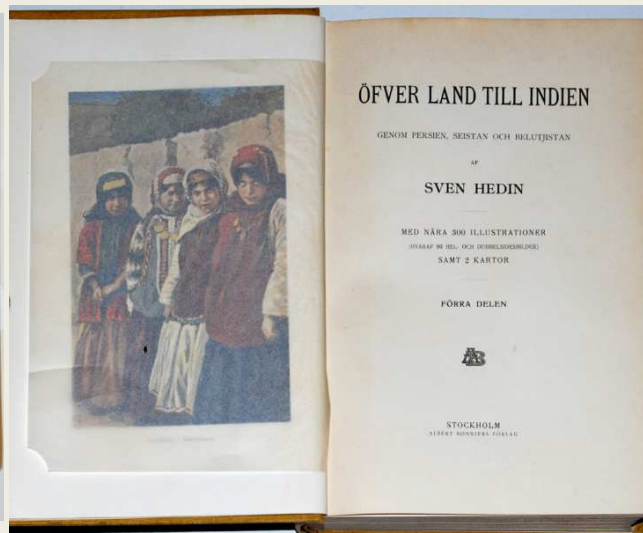
「19世紀のペルシアを旅したヨーロッパの旅行家たち

ー バンペリー、ヘディン、サイクス、スタイン、カーゾン と、明治前期の日本人の旅行記を中心に」



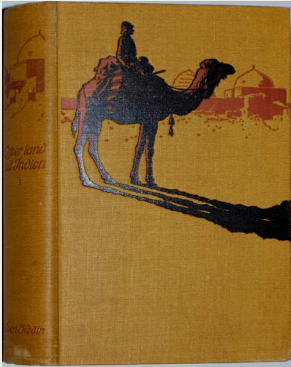
『陸路インドへペルシア、セイスタン、バルチスタンを通りてー』S.ヘディン、1910年刊
ヘディンによる、3次探検(1906-08)の報告書

下は、第1巻の見開き

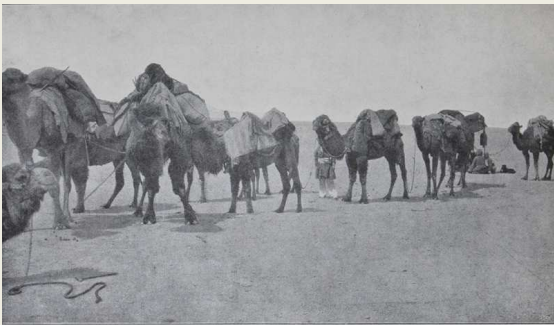


1905年 ストックホルムを出発。ーその年の秋に日露戦争は終わる。
旅は、ヨーロッパ〜トルコ〜黒海〜テヘラン(こらで1906年)〜砂漠地帯(これは
マルコ・ポーロのルート)〜ペルシアの南〜アフガンの南の端〜インドへ〜北へ。

以下、第1巻所載の図版を紹介。



Ett rastställe på armenska höglandet.



En kort rast.



Ali Mirza,
den 1899 skapade Schahen af Persien.



En persisk skönsöhet.
Fotografen är tagen af en armenier i Teheran.



Kurdiska barn.

ペルシア人の若い女性

クルドの人たち

当時の女性の服装：現代(下写真)とは違う。



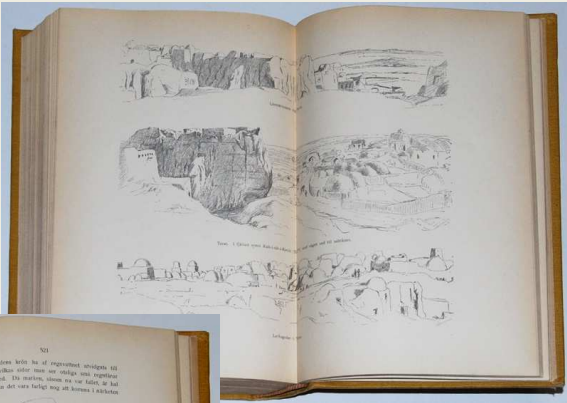


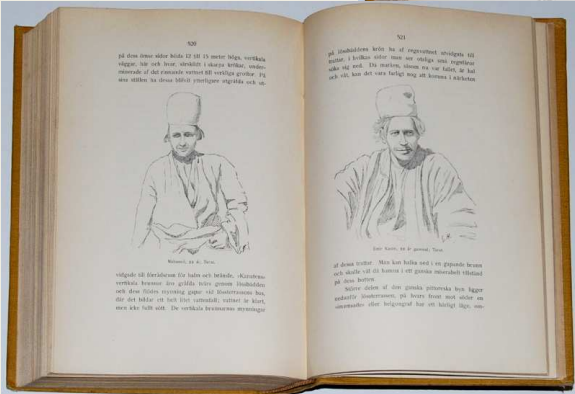
Damer i promenaddrätt.
Fotografien är tagen af en armenier i Teheran.

参謀本部派遣の工兵中佐・古川宣譽が
スケッチしたペルシア婦人(明治24(1841)年)



En haremgård i Teheran.





「19世紀のペルシアを旅したヨーロッパの旅行家たち

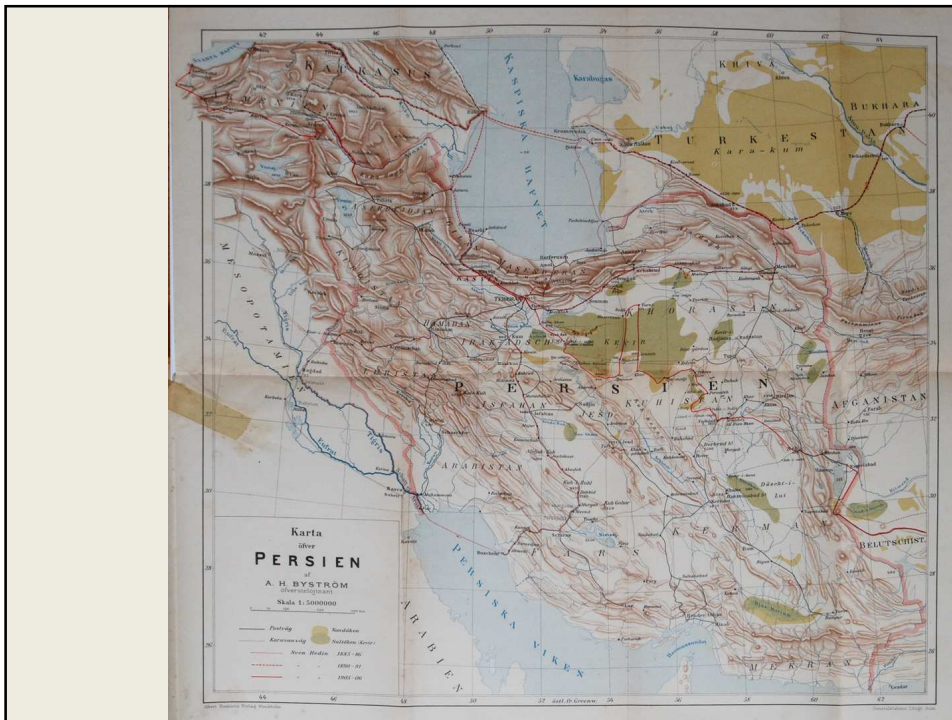
ー バンペリー、ヘディン、サイクス、スタイン、カーゾン と、明治前期の日本人の旅行記を中心に ー



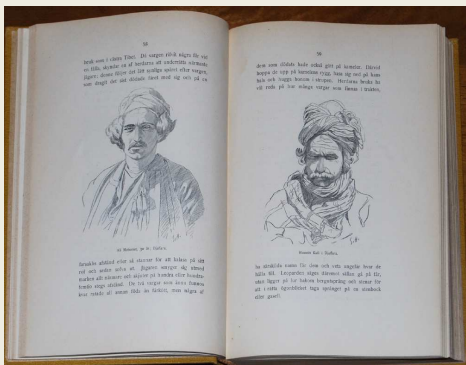
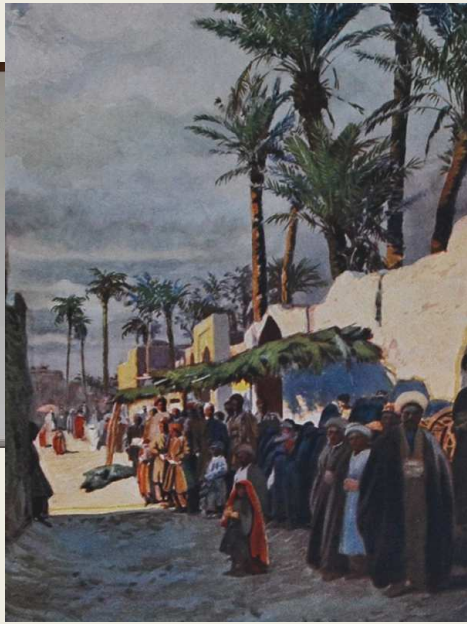
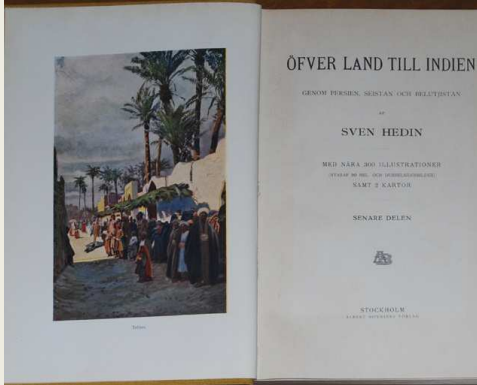
Göthar i Aleh.



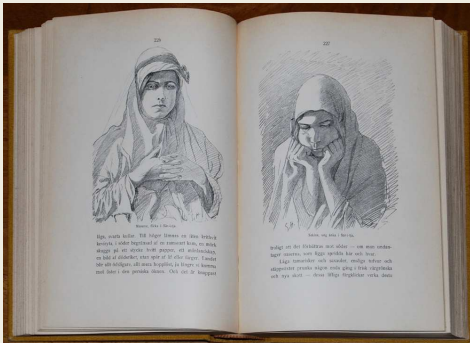
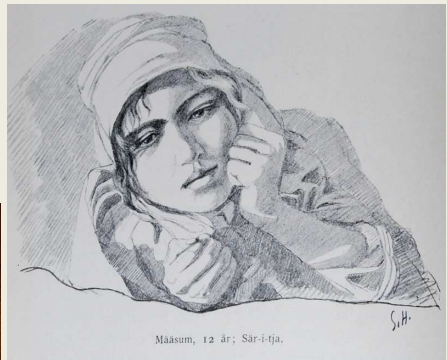
Vår vägnare Ali Murat och hans fyra kameler, som bärar den gamla Kevir.



続いて、第2巻所載の図版を。

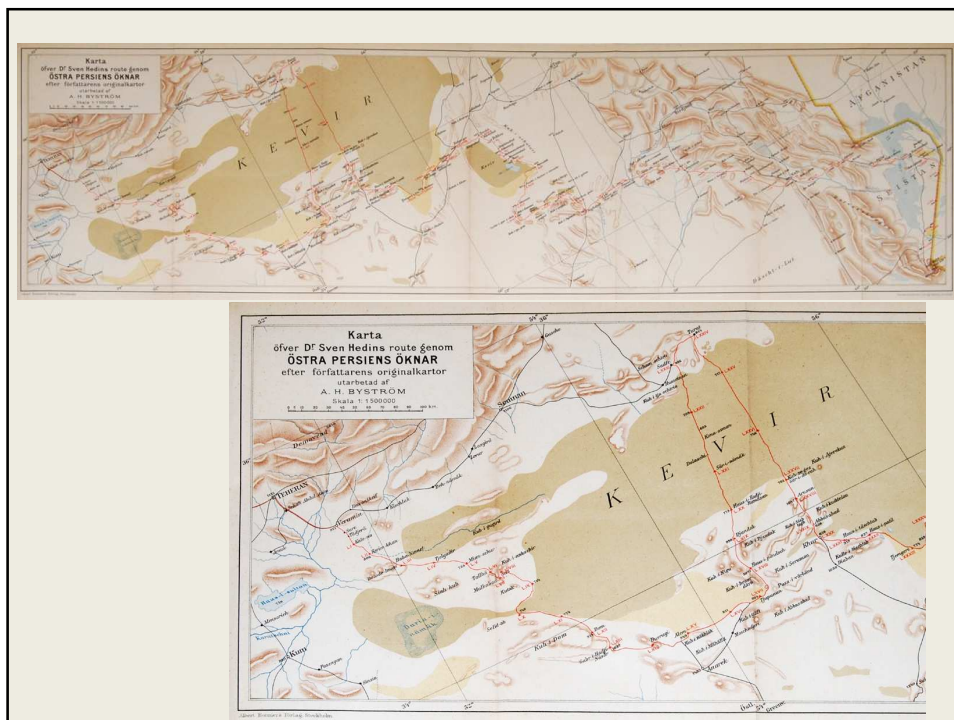
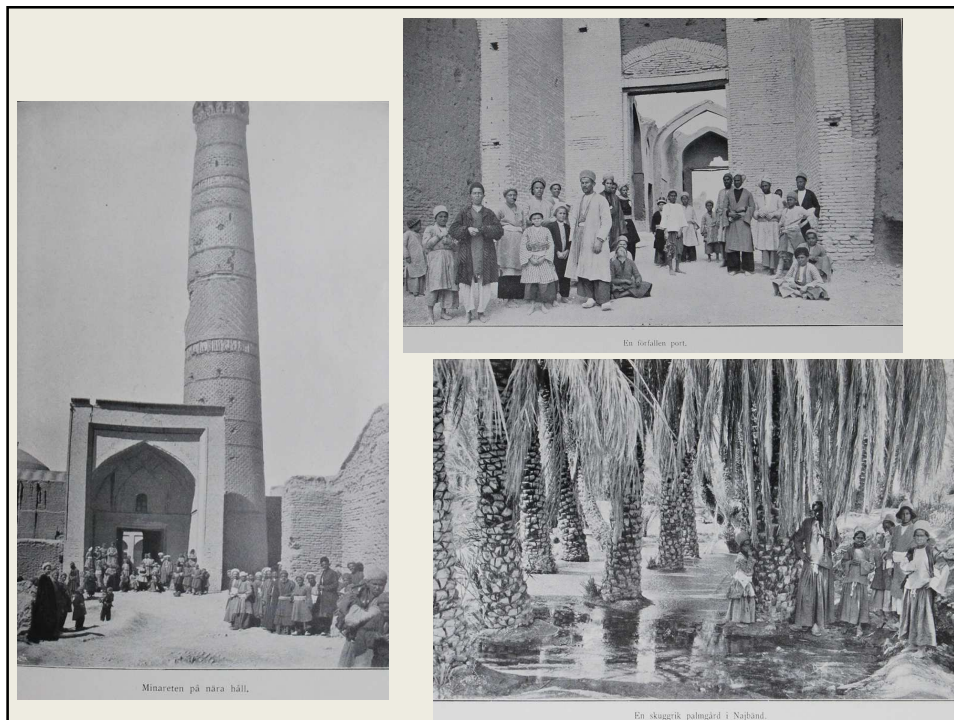


この書でも同様に、多くの人物画スケッチが



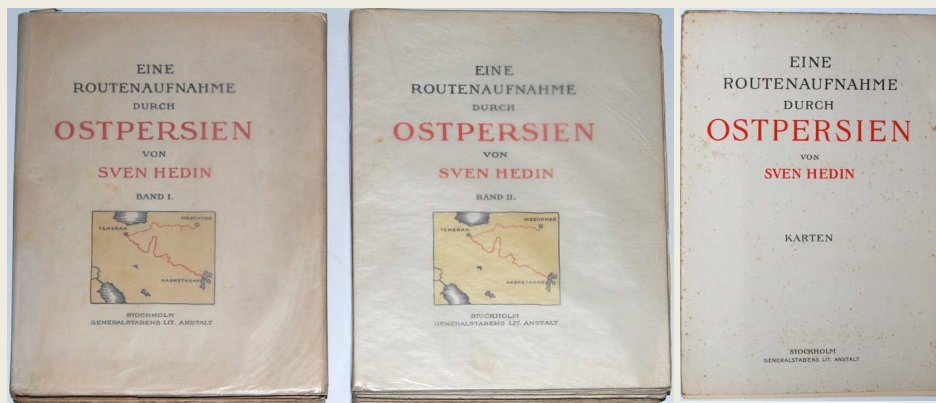
「19世紀のペルシアを旅したヨーロッパの旅行家たち

ー バンベリー、ヘディン、サイクス、スタイン、カーゾン と、明治前期の日本人の旅行記を中心に ー

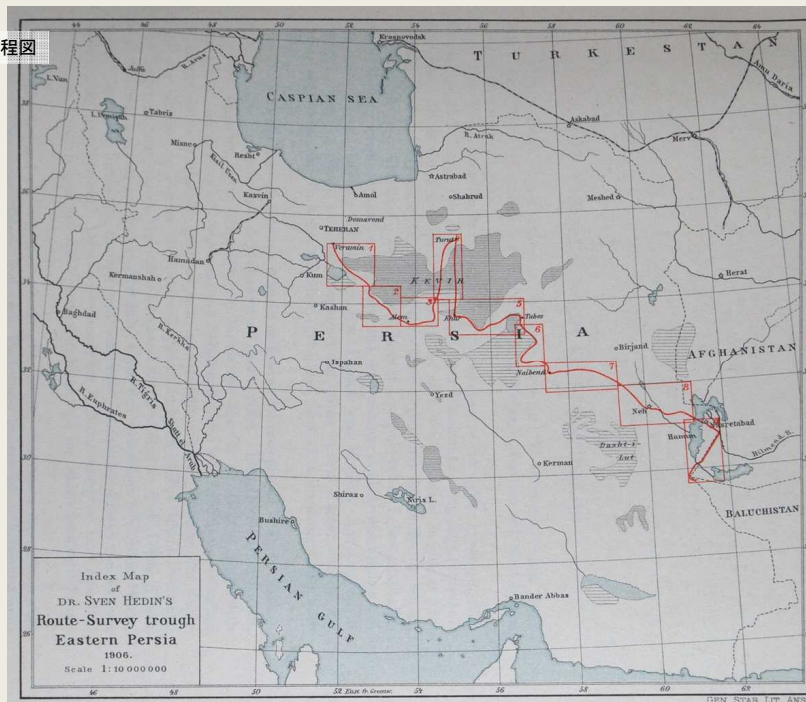


『東ペルシアの路線測量』S.ヘディン、1918・1927年刊:本文2巻と地図1冊(右)

地図に刊行年の記述はないが、たぶん、1927年(Band II)との同時出版。



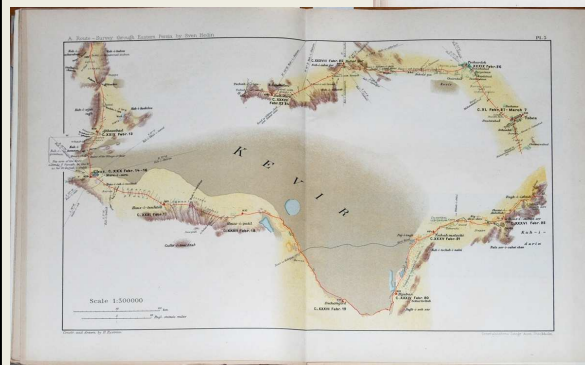
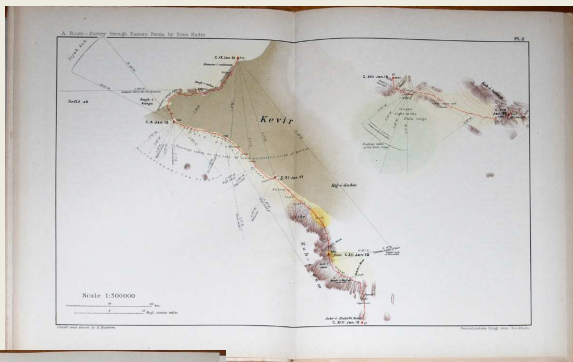
調査の行程図



「19世紀のペルシアを旅した ヨーロッパの旅行家たち

ー バンベリー、ヘディン、サイクス、スタイン、カーゾン と、明治前期の日本人の旅行記を中心に ー

前ページにあった部分図

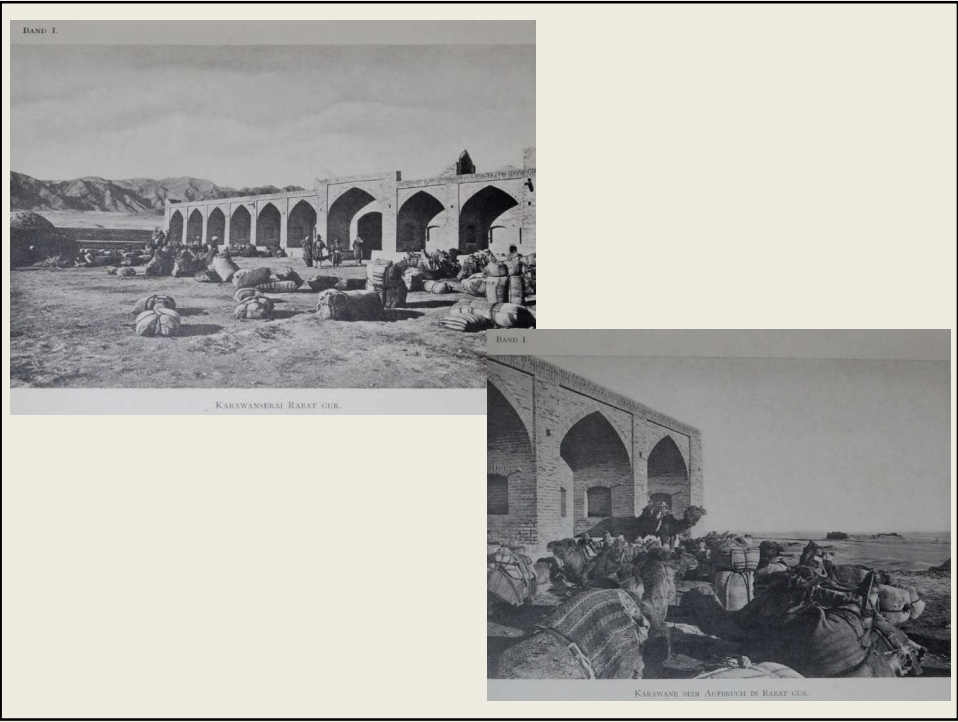


このようなパノラマ図も



上図の部分拡大





3巻のうち「地図集」の 内容 — 8枚組の100万国図から、その左上部分を構成する1枚を。





ヴァンベリー

『中央アジアの旅』ヴァンベリー、1855

ハンガリー系ユダヤ人で、ペルシアを放浪して、
当時、入域困難な西トルキスタンへ。
ヘディンがこの書を読んで、ペルシアへ志す。
中央アジアの、古典中の古典。 [（金子さんによる。）](#)

TRAVELS
IN
CENTRAL ASIA;
A JOURNEY FROM TELLERAN ACROSS THE
TURKOMAN DESERT ON THE EASTERN SHORE OF THE CAS-
PIAN TO KHIVA, BOKHARA, AND SAMARKAND.
PUBLISHED IN THE YEAR 1855.
By ARMINIUS VAMBERY,
MEMBER OF THE STRELIANSKY ACADEMY OF SCIENCES, BY WHOM HE WAS SENT ON
HIS EXPLORING MISSION.
NEW YORK:
HARPER & BROTHERS, PUBLISHERS,
FRANKLIN SQUARE,
1855.

以下、同書より



ENTRY OF THE EMIR INTO SAMARCAND.
(The Buildings after a sketch by Mr. Lehman.)

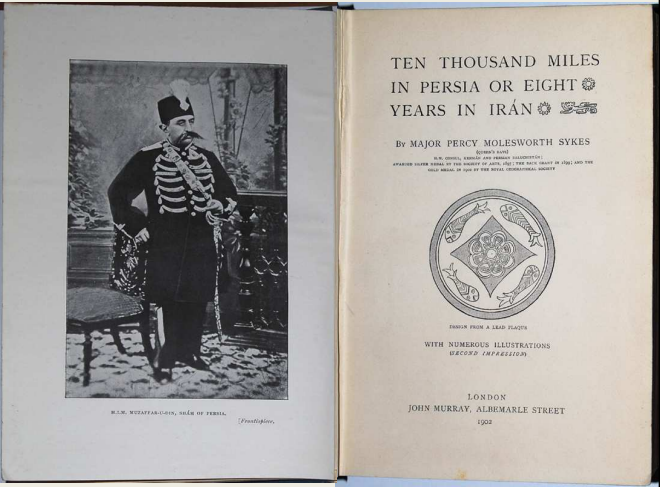
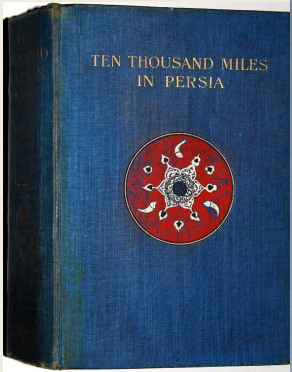




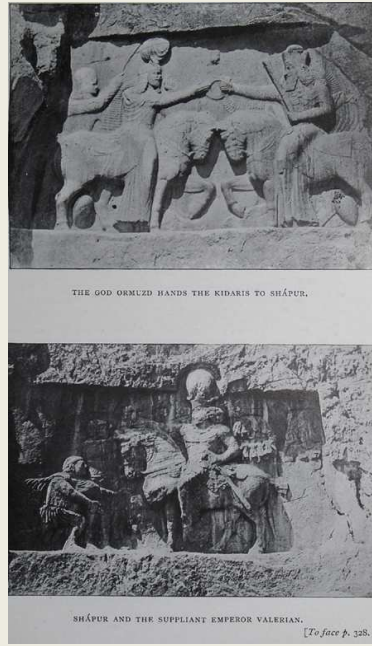
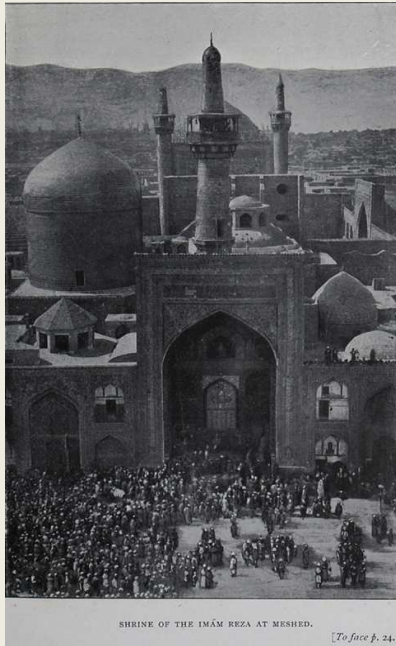
サー・パーシィ・サイクス

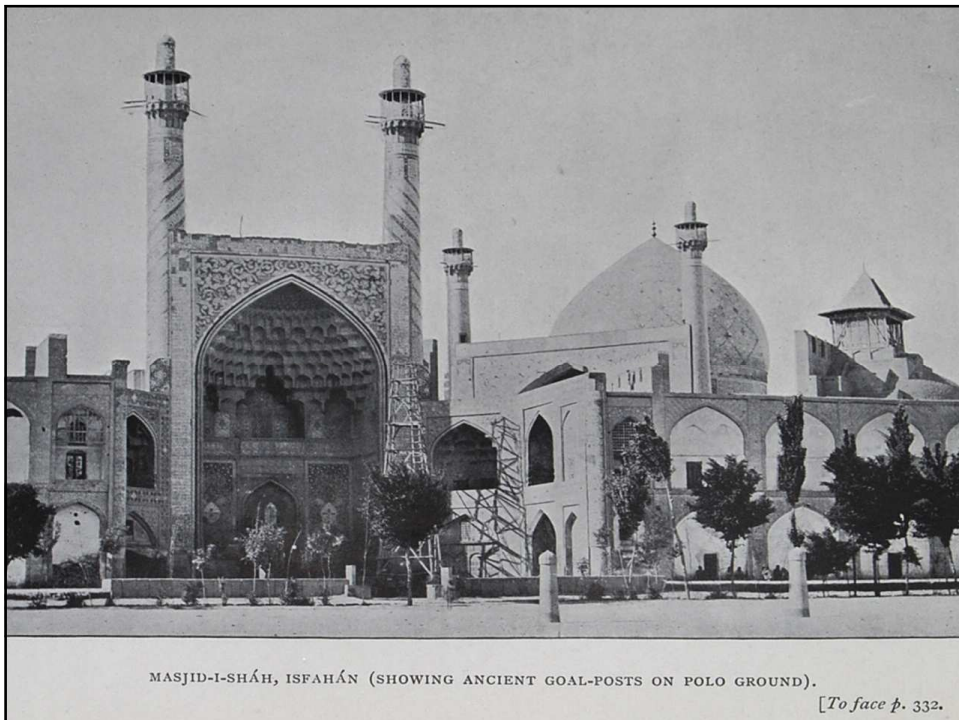
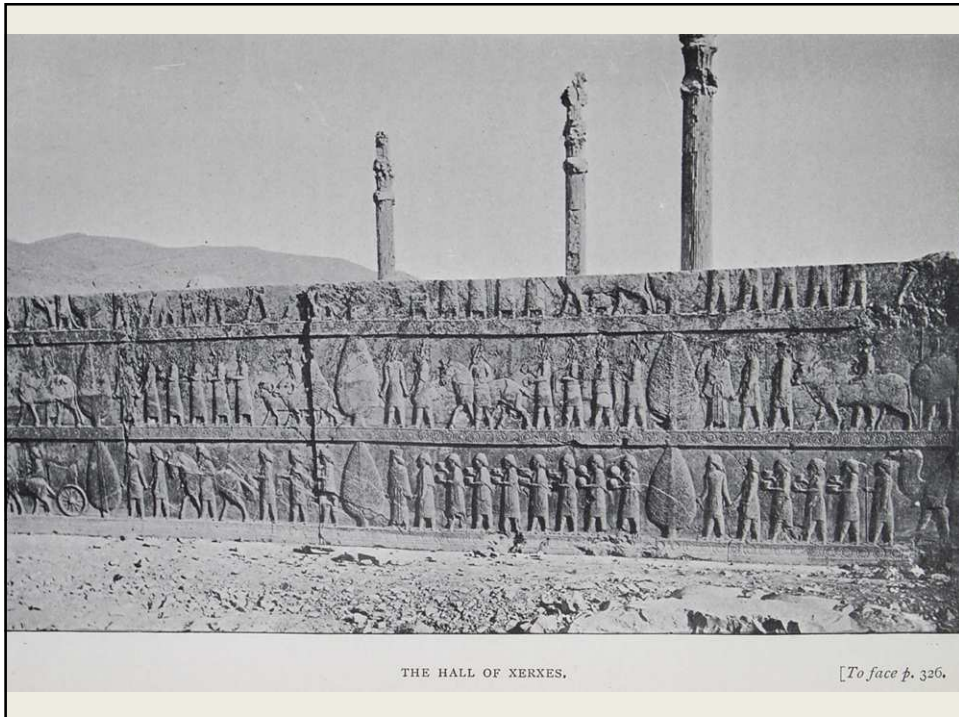
『ペルシアを数千マイルーイランでの8年』
Major パーシィ・M.サイクス、1902

ペルシアの広域についての旅行記。軍人でスパイ。
当時の中東についての、もっとも魅惑的な書。
この書は、日本では紹介されていない。
(金子さんによる。)

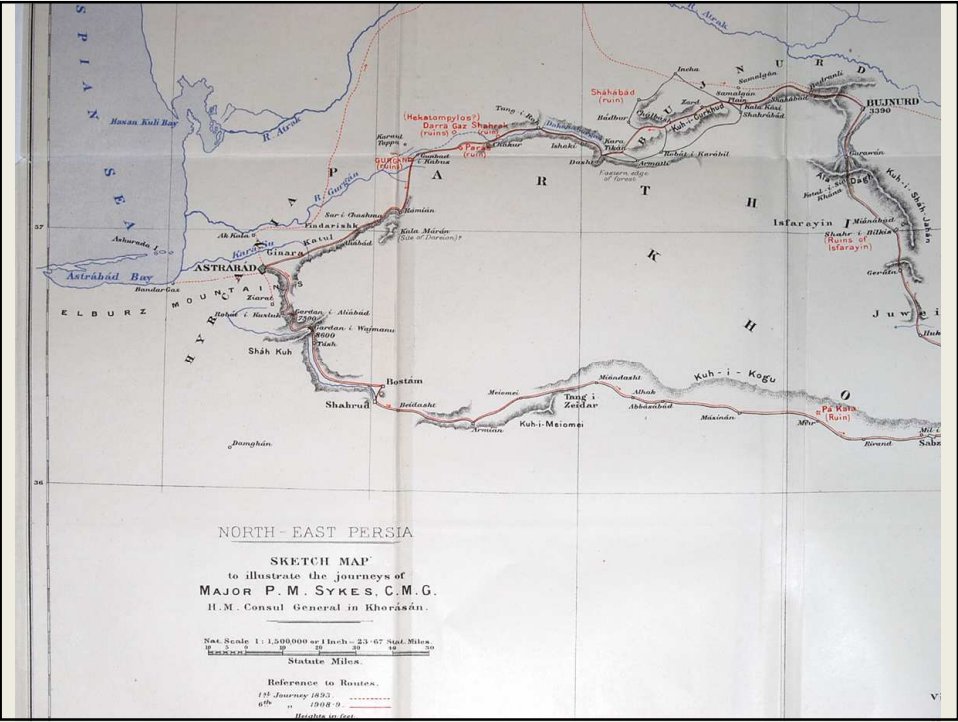
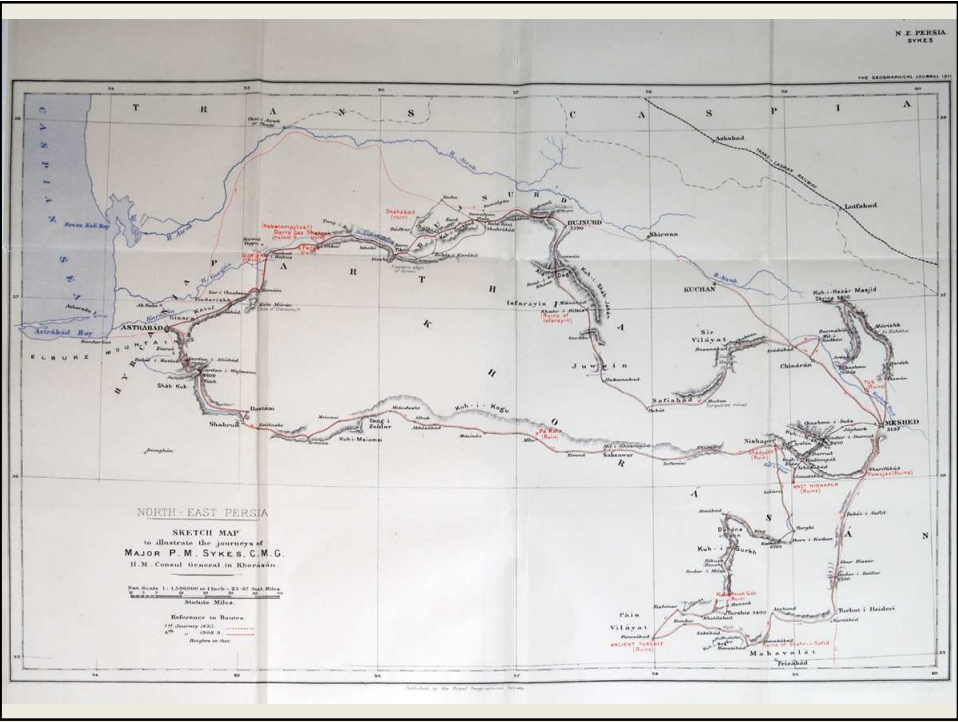


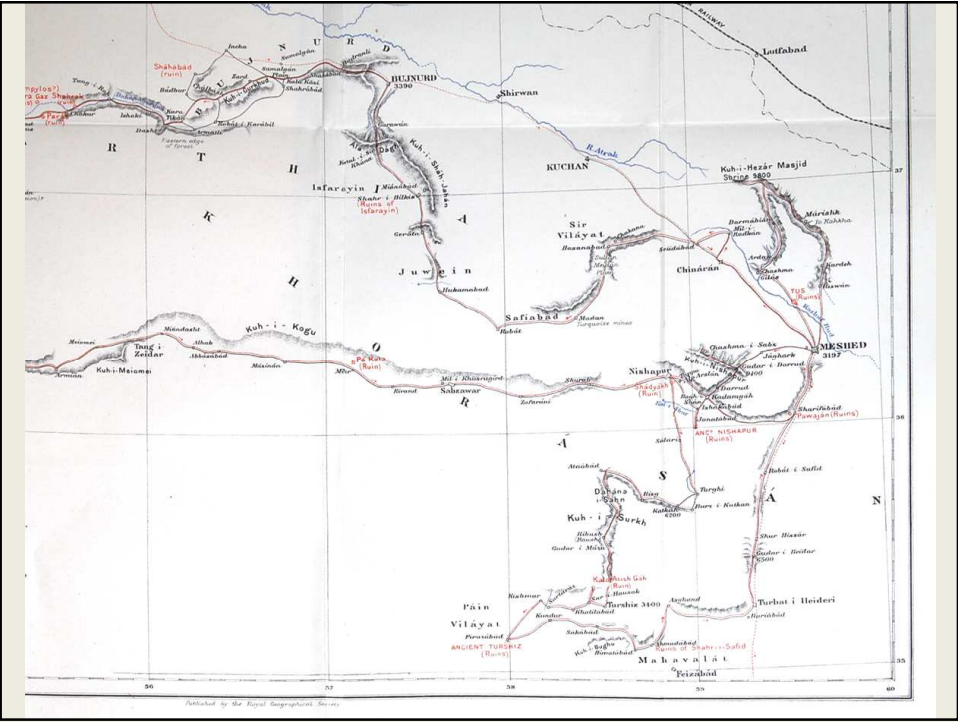
以下、同書より



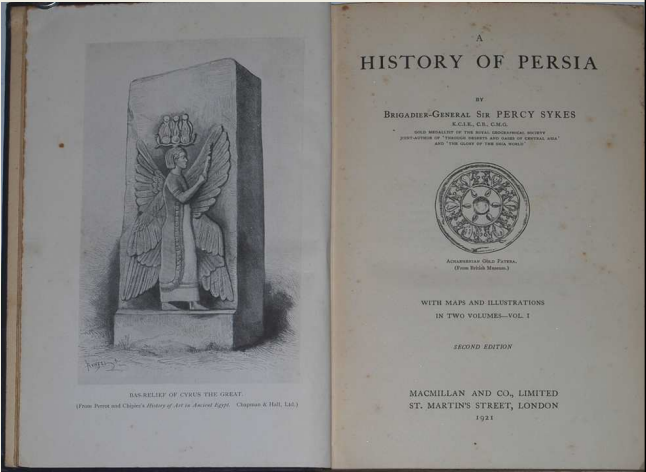
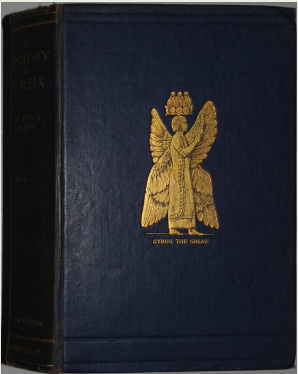


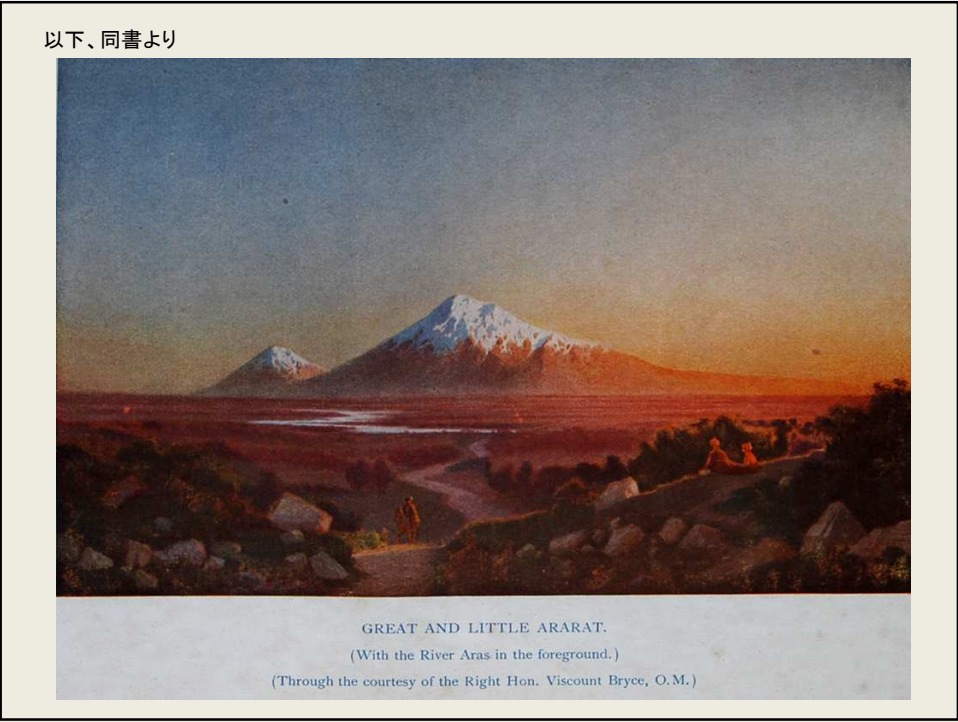
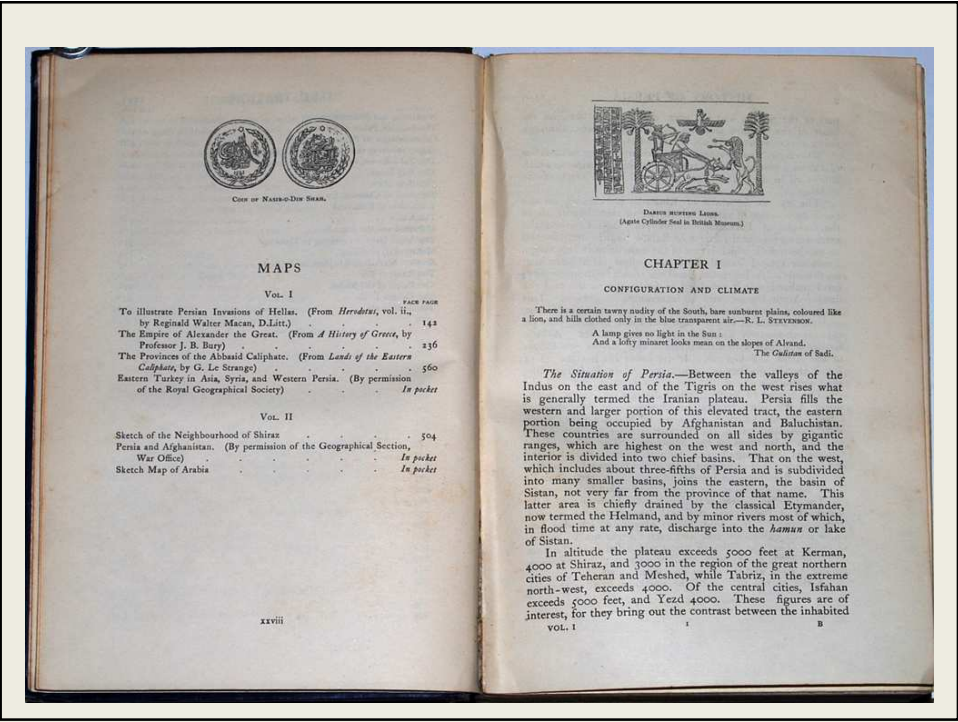


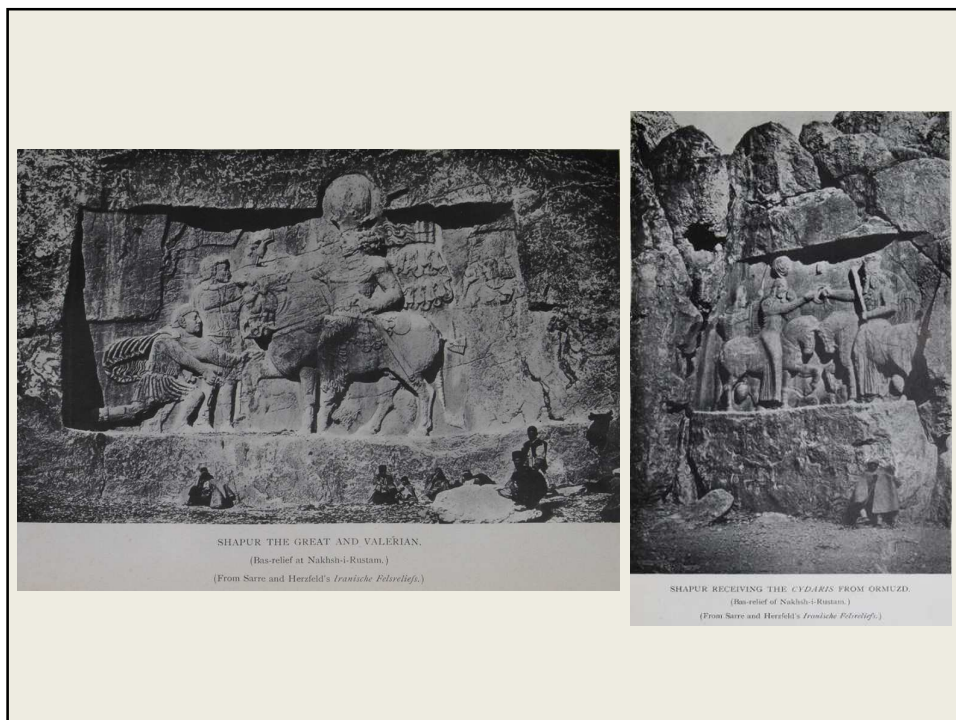
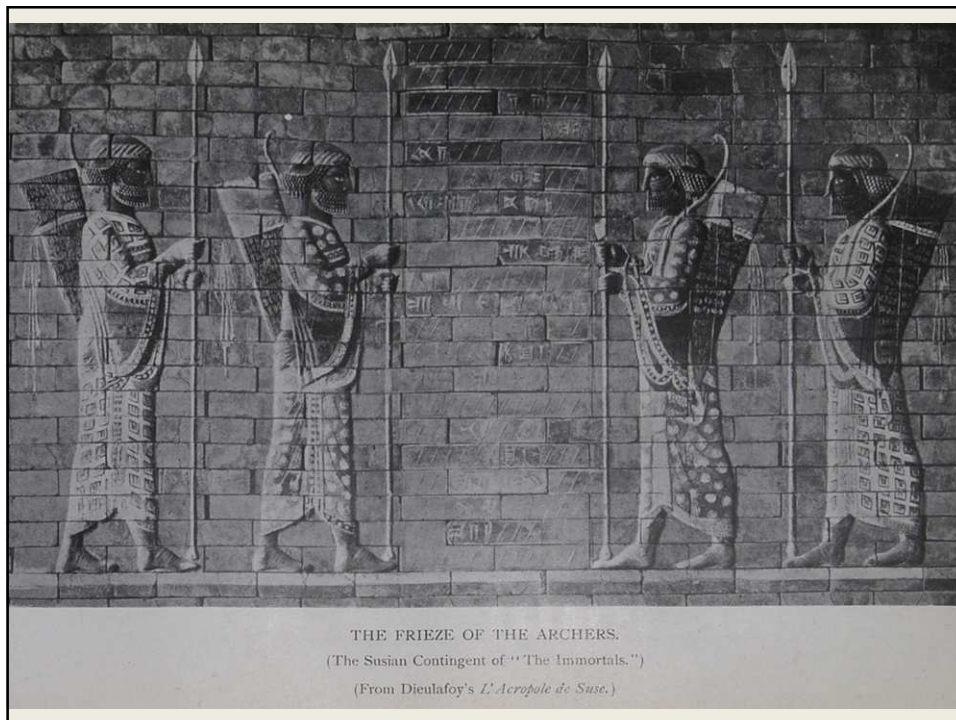


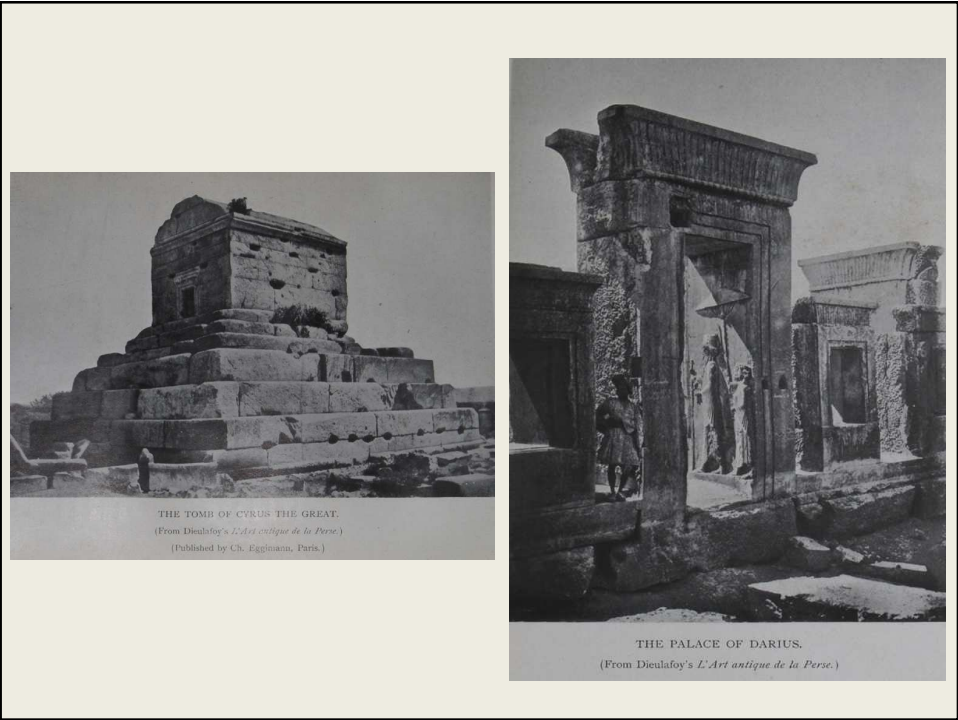


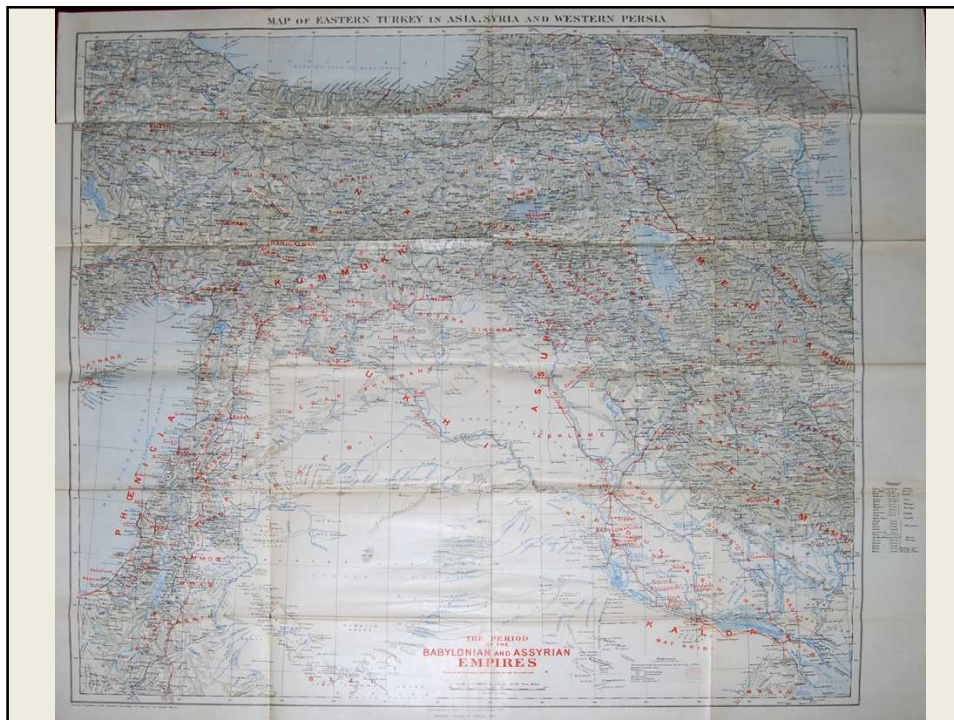
『 Histry of Persia Vol. I 』 Sir Percy Sykes, 1921



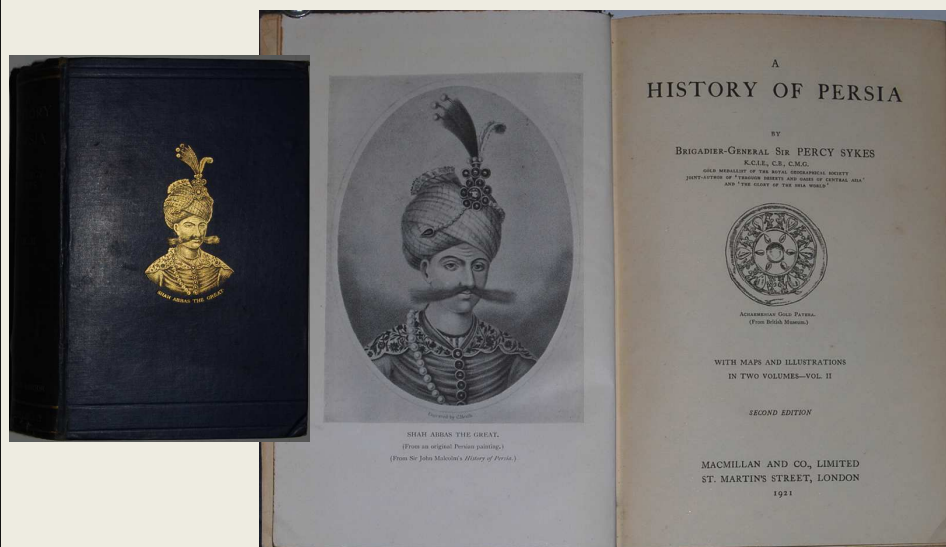








『 Histry of Persia Vol. II 』 Sir Percy Sykes, 1921



以下、同書より



From a photograph by the Author.

MESHED, THE SACRED CITY OF PERSIA.

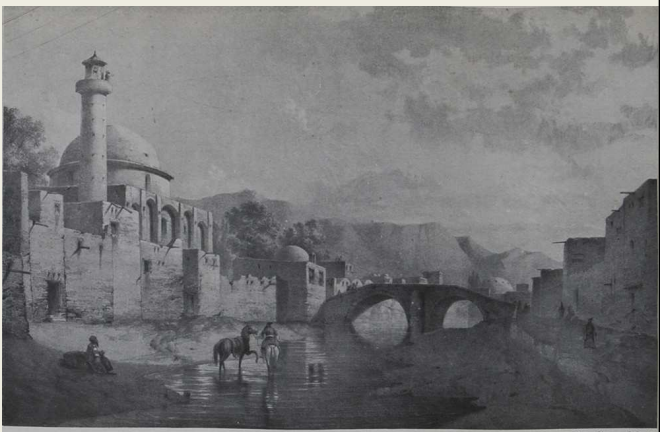
The photograph was taken from the city wall, and shows the mosque of Gauhar Shad (left) and the golden dome (centre) in the background.



From a photograph by Major J. W. Watson.

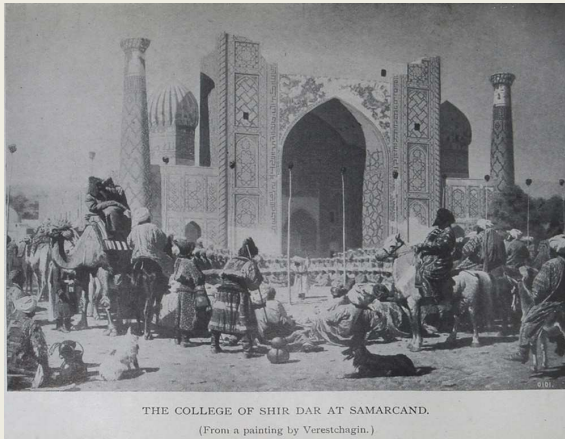
THE GUNBAD-I-KABUS.

The buildings which appear in the photograph belong to the Russian contingent.

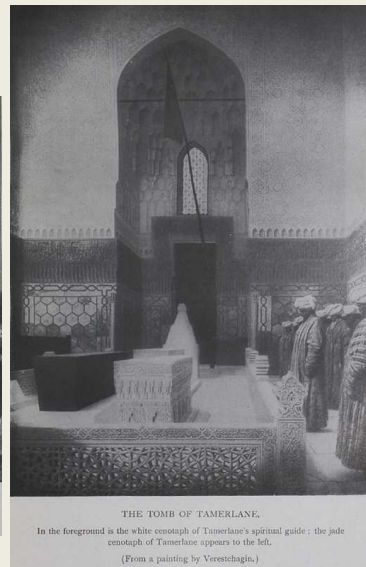


Flandin and Coste.

TABRIZ.



THE COLLEGE OF SHIR DAR AT SAMARCAND.
(From a painting by Verestchagin.)



THE TOMB OF TAMERLANE.
In the foreground is the white cenotaph of Tamerlane's spiritual guide ; the jade cenotaph of Tamerlane appears to the left.
(From a painting by Verestchagin.)

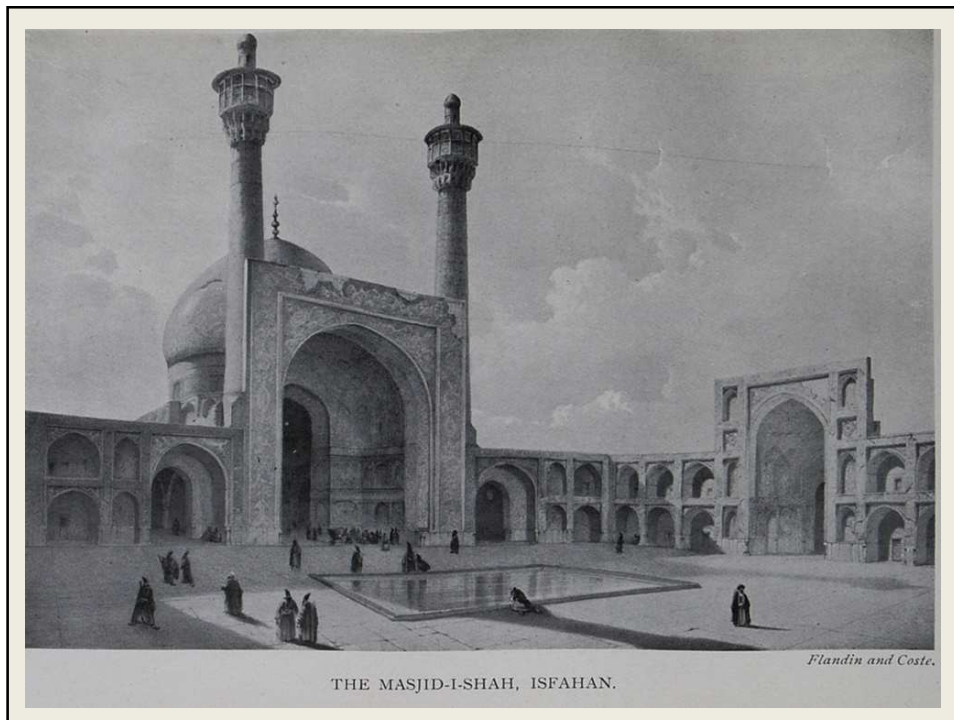


Flaudin and Coste.

THE HAFIZIYYA OR GARDEN OF HAFIZ.

"When to my grave thou turnest thy blessed feet,
Wine and the lute shalt thou bring in thy hand to me,
Thy voice shall ring through the folds of my winding-sheet,
And I will arise and dance to thy minstrelry."

(From the Ode chiselled on the tomb, translated by Miss Gertrude Bell.)





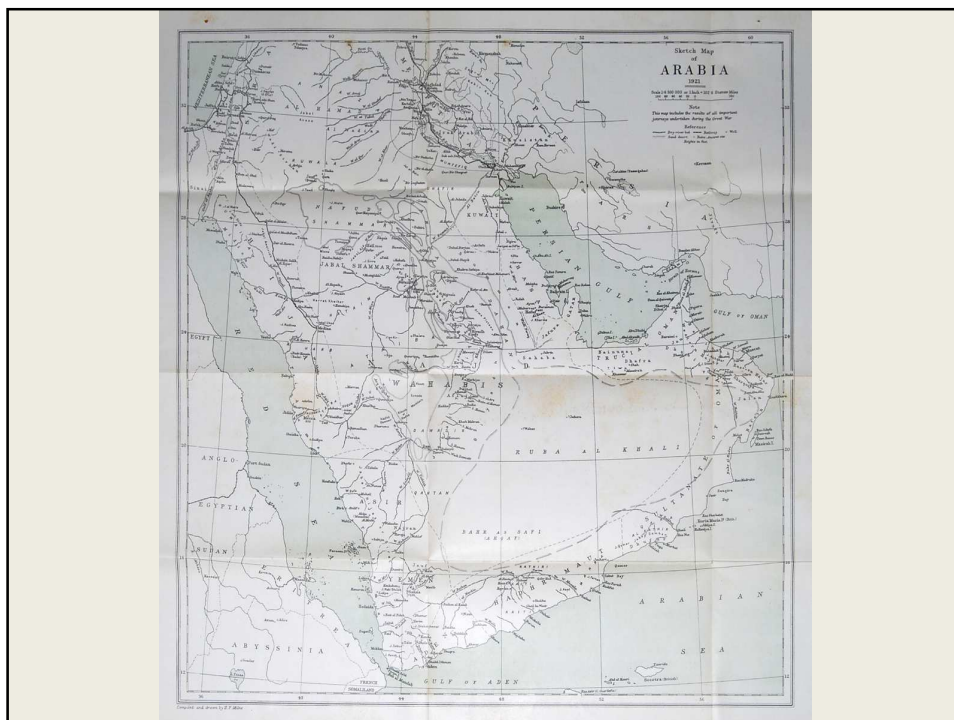
Commandant Bielomestonov. Brig.-Gen. Sir Percy Sykes.
GROUP OF ANGLO-RUSSIAN OFFICERS AT ISFAHAN.



From a photograph by Major J. W. Watson.
MOHAMED GELDI KHAN, CHIEF OF THE GOKLAN TURKOMAN, AND WOMEN.

「19世紀のペルシアを旅したヨーロッパの旅行家たち

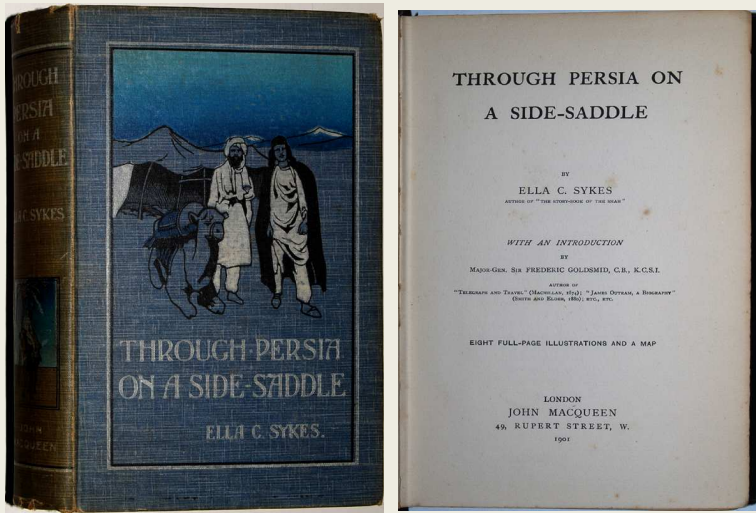
ー バンベリー、ヘディン、サイクス、スタイン、カーゾン と、明治前期の日本人の旅行記を中心に ー



パーシー・サイクスの妹の、エラ・サイクス

『 Through Persia on a Side-Saddle 』
エラ C, サイクス、1855

妹の方が、たくさんの本を著した。
女性探検家としてトップレベル。(金子さんによる。)



以下、同書より

This Book
IS DEDICATED TO THE
MANY FRIENDS
WHOSE GREAT KINDNESS
MADE MY TRAVELS IN PERSIA
SO PLEASANT

CONTENTS

CHAP.	PAGE
PREFACE	vii
INTRODUCTION	ix
I. THE JOURNEY TO THE CAPITAL OF PERSIA	1
II. TEHRAN	14
III. FROM THE CAPITAL TO FATIMA'S SHRINE AT KOOM	30
IV. AS FAR AS KASHAN	41
V. TO THE GOAL OF OUR JOURNEY VIA YEZD	50
VI. HOUSEKEEPING AT KERMAN	72
VII. KERMAN AND ITS ENVIRONS	90
VIII. OLLA PODRIDA	101
IX. FOUR VISITORS AND A MAID	117
X. OUR STAY IN THE HILLS	128
XI. OUR SOCIAL CIRCLE AT KERMAN	148
XII. ARABABAD AND SAGOTCH, PERSIAN LADIES AND SOME PERSIAN CUSTOMS	163
XIII. LAST MONTHS AT KERMAN AND THE START TO BALUCHISTAN	181
XIV. THROUGH THE DESERT TO BAMPUR AND PAHRA	201
XV. TO KUHAK AND THE FRONTIER COMMISSION	218
XVI. WITH THE PERSO-BALUCH BOUNDARY COMMISSION	230
XVII. TO QUETTA WITH THE BRITISH COMMISSION	244
XVIII. UP THE PERSIAN GULF TO BUSREH	256
XIX. THE KARUN RIVER AND AHWAZ	270
XX. FROM BUSREH TO TEHRAN AGAIN	286
XXI. TEHRAN REVISITED, AND THE JOURNEY HOME TO ENGLAND	295

以下、同書より



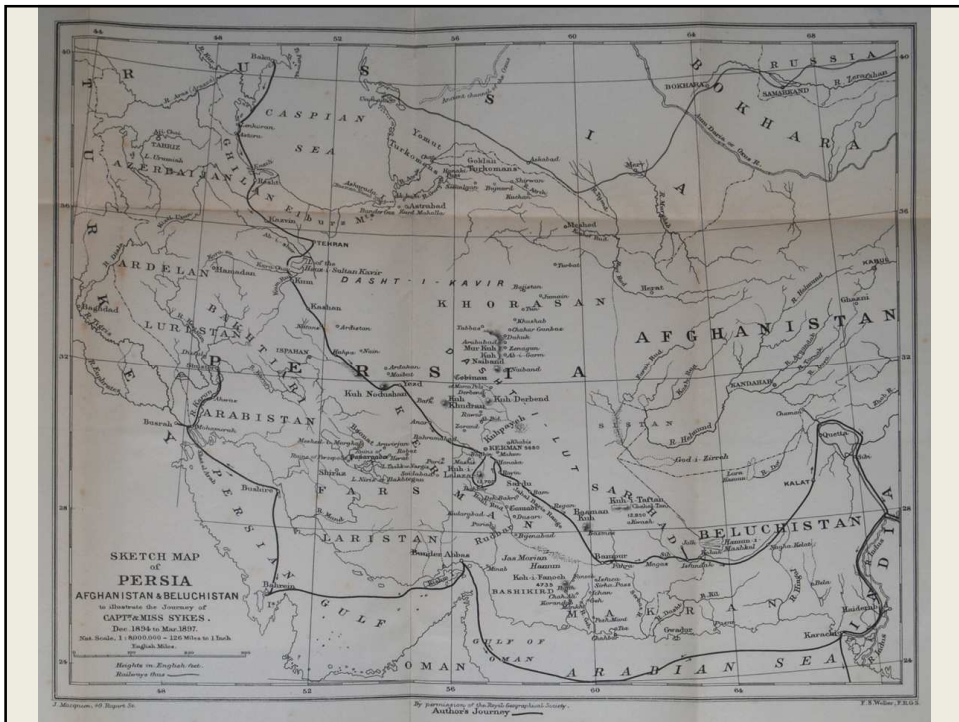
PERSIAN LADY IN INDOOR COSTUME.

[To face p. 17.]

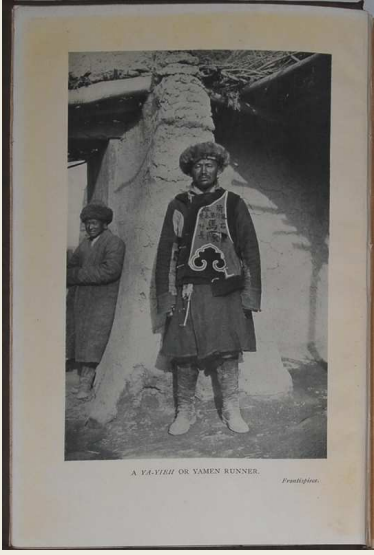
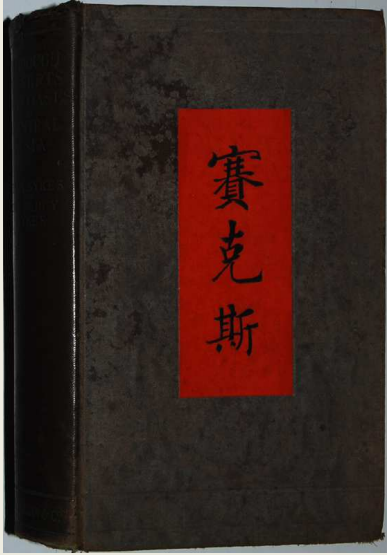


KUHAK, WHERE THE FRONTIER COMMISSION MET.

[To face p. 225.]



『 Through Persia on a Side-Saddle 』 エラ C. サイクス、1855

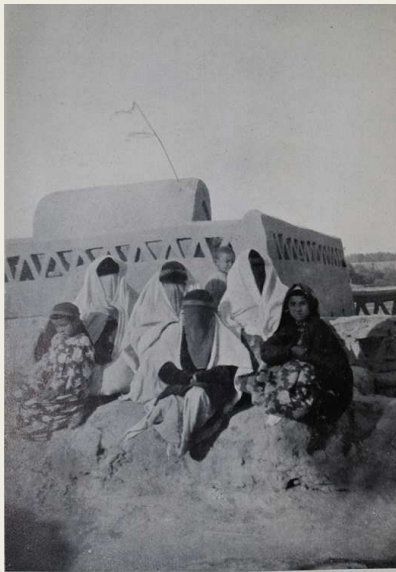


以下、同書より

CONTENTS	
PART I	
CHAPTER I	page
ACROSS THE DESERTS OF KASHGAR IN WINTER	3
CHAPTER II	
BEYOND THE TIAN SHAN TO KASHGAR	15
CHAPTER III	
LIFE AT KASHGAR	29
CHAPTER IV	
BOYS ABOUT KASHGAR	66
CHAPTER V	
OLLA PODRIDA	85
CHAPTER VI	
ON THE WAY TO THE ROMAN FARM	108
CHAPTER VII	
THE ROOF OF THE WORLD	129

viii THROUGH DESERTS AND OASIS	
CHAPTER VIII	page
THE ARMY OF SAMBUR	145
CHAPTER IX	
THE ANCIENT CITY OF YAKAND	175
CHAPTER X	
THROUGH THE DESERT TO KHOTAN	191
CHAPTER XI	
KHOTAN THE KINGDOM OF JADE	209
PART II	
CHAPTER XII	
THE GEOGRAPHY, GOVERNMENT AND COMMERCE OF CHINESE TURKISTAN	235
CHAPTER XIII	
AN HISTORICAL SKETCH OF CHINESE TURKISTAN: THE EARLY PERIOD	249
CHAPTER XIV	
AN HISTORICAL SKETCH OF CHINESE TURKISTAN: THE MIDDLE AND LATE PERIODS	263

CONTENTS ix	
CHAPTER XV	page
AN HISTORICAL SKETCH OF CHINESE TURKISTAN: THE MODERN PERIOD	275
CHAPTER XVI	
A KASHGAR FARMER	300
CHAPTER XVII	
MARSHES AND OASIS IN CHINESE TURKISTAN	308
CHAPTER XVIII	
STALKING THE GREAT SHEEP OF MARCH FOLD	324
INDEX	335



THE SHRINE OF BIBI ANNA.

Page 92.



A HUNTING EAGLE.

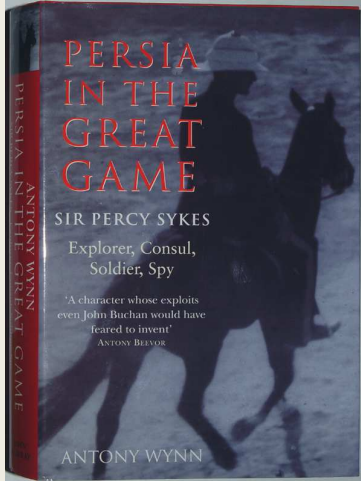
Page 152.



KASHGAR MUSICIANS.

Page 170.

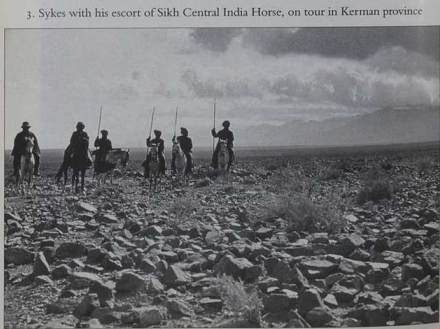
『 Persia in the Grate Game -Sir Percy Sykes Explorer, Consul, soiider, Spye
— Sir Percy Sykes Explorer, Consul, Soidir, Spy 』 Antony Wynn, 2003



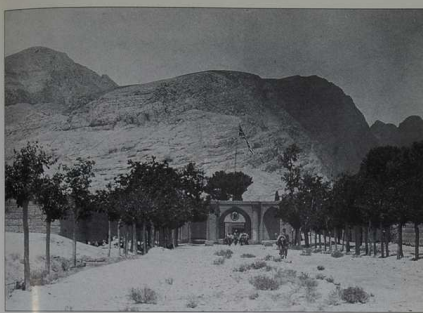
1. Sykes, disguised as a Russian, in Baku, before embarking on his spying trip to Samatqand, 1892



2. Prince Farman Farma (in terai hat) and hunting party, 1893. The friendship between Sykes and the Prince was a crucial element in Anglo-Persian relations until the end of the First World War

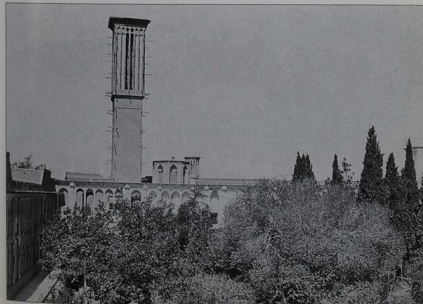


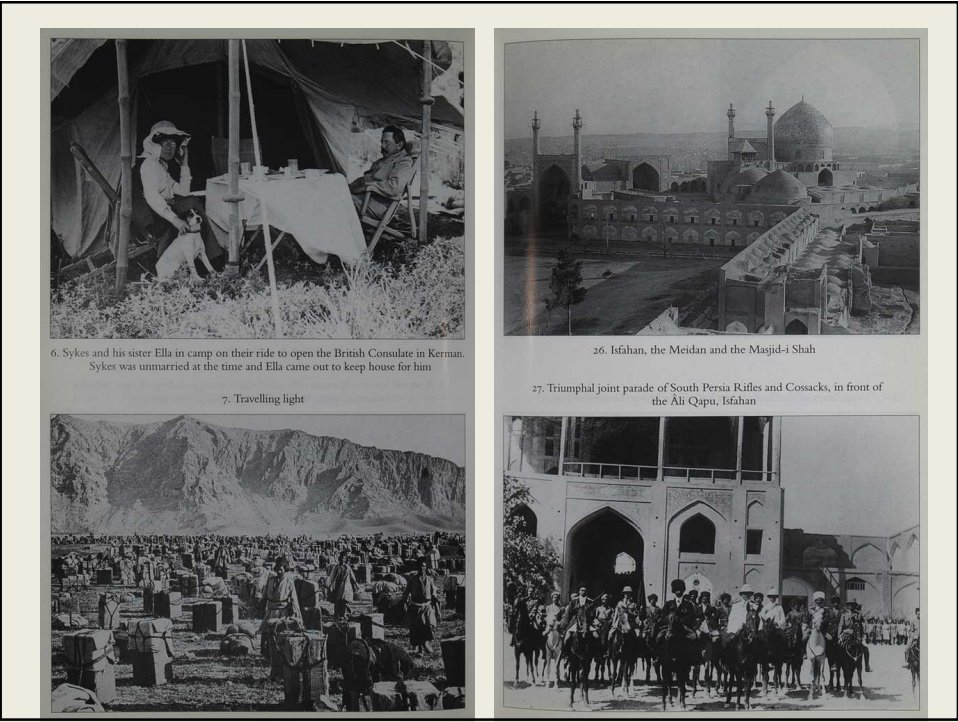
3. Sykes with his escort of Sikh Central India Horse, on tour in Kerman province



4. The British Consulate, Kerman, 1894

5. A typical house in Kerman. The wind tower draws a cooling draught into the basement, where the family retreats for the hot summer





ペルシアにおける A.スタインの事績

サー・オーレルスタイン, 1862-1943
英国(ハンガリー生まれ)の考古学者で探検家。
1900年から1916年まで、3回にわたり主にタリム盆地周辺の探検旅行と考古学的発掘。敦煌莫高窟から膨大な経典類を将来したこと有名。他の探検家とは違って、インド測量局の優秀な技師を同行したので、詳しい地図を作成できた。
後年は西アジアを研究対象とする。カーブルに客死、82歳。

『西イランの古道』A.スタイン、1940年刊 十字軍時代の遺跡の発掘報告書。

金子さんコメント： ペルシア、近東に関するスタインの本は合計3冊あり、これは第1号。第3号は、戦後、未定稿のものとして出版された。

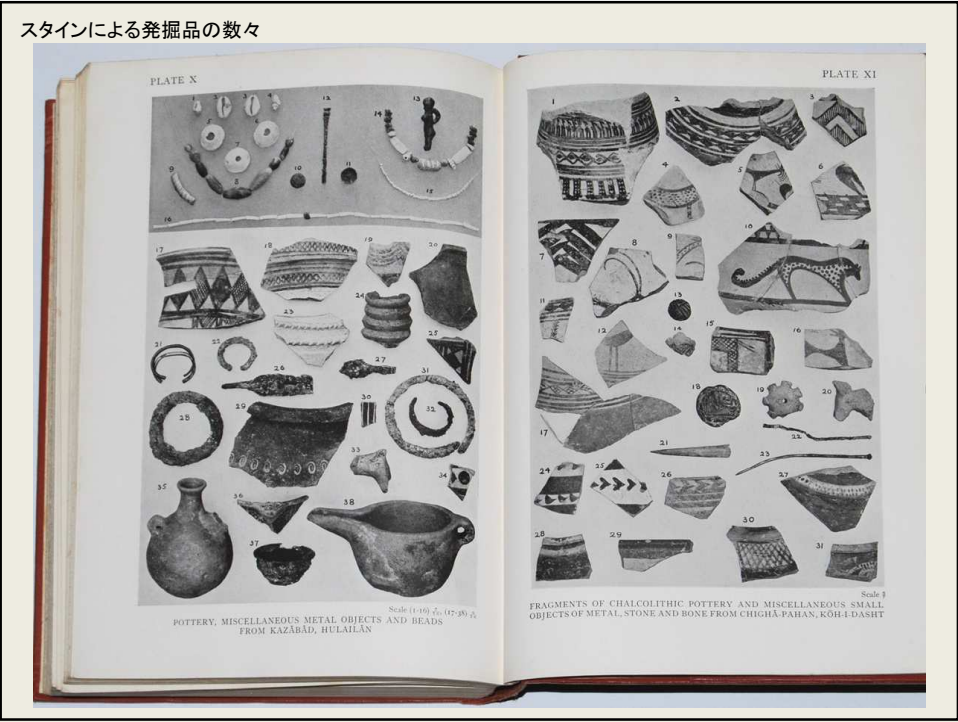
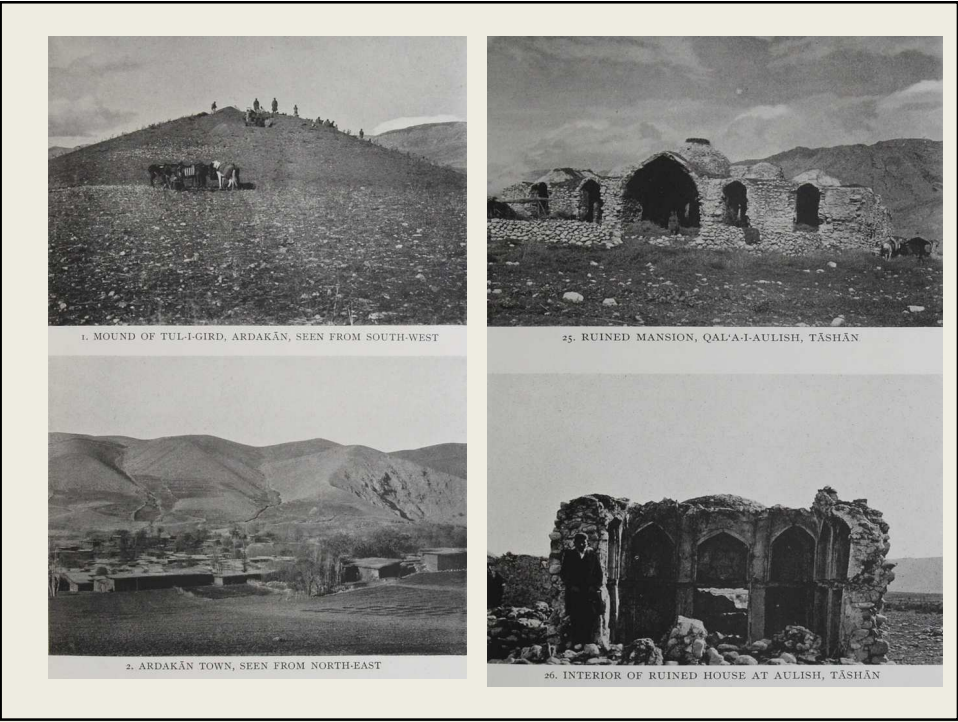
TO
SIR EDWARD D. MACLAGAN
K.C.S.I., K.C.I.E.
LATE GOVERNOR OF THE PUNJAB

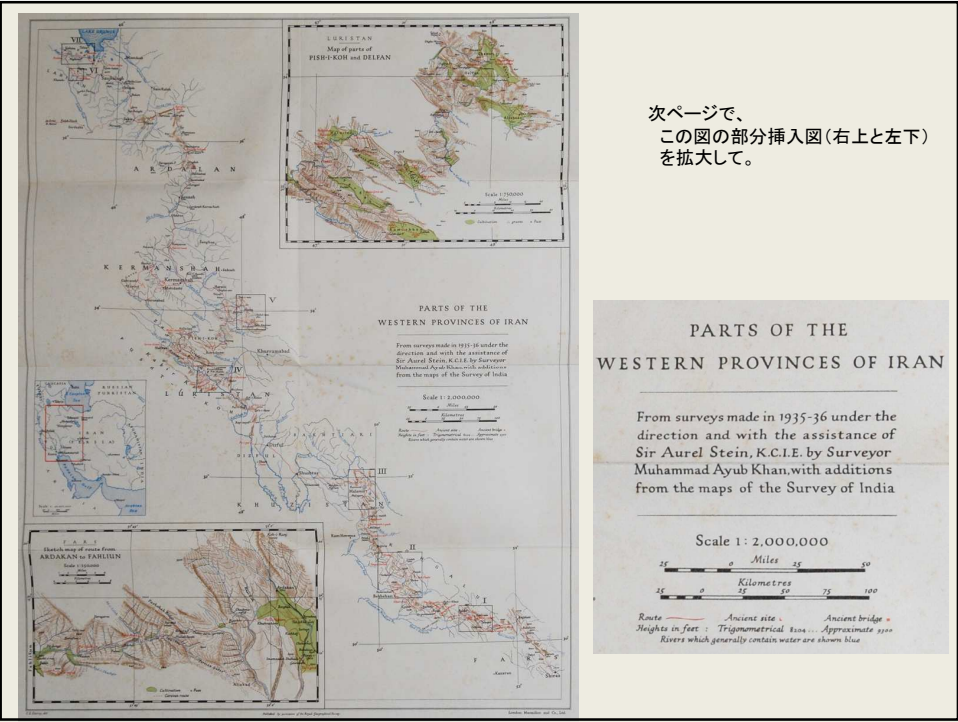
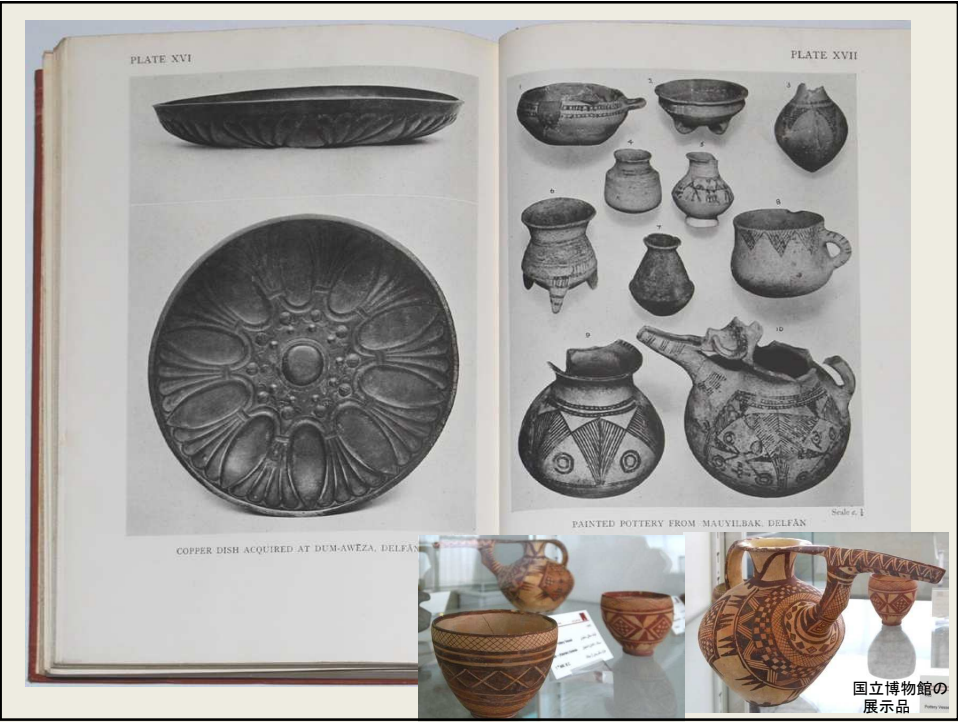
THE FRIEND WHOSE SYMPATHY AND HELP
ENCOURAGED AND FURTHERED MY EFFORTS
FROM THE START OF MY INDIAN CAREER
THIS RECORD OF EXPLORATORY TRAVEL
IS INSCRIBED
IN GRATEFUL AFFECTION

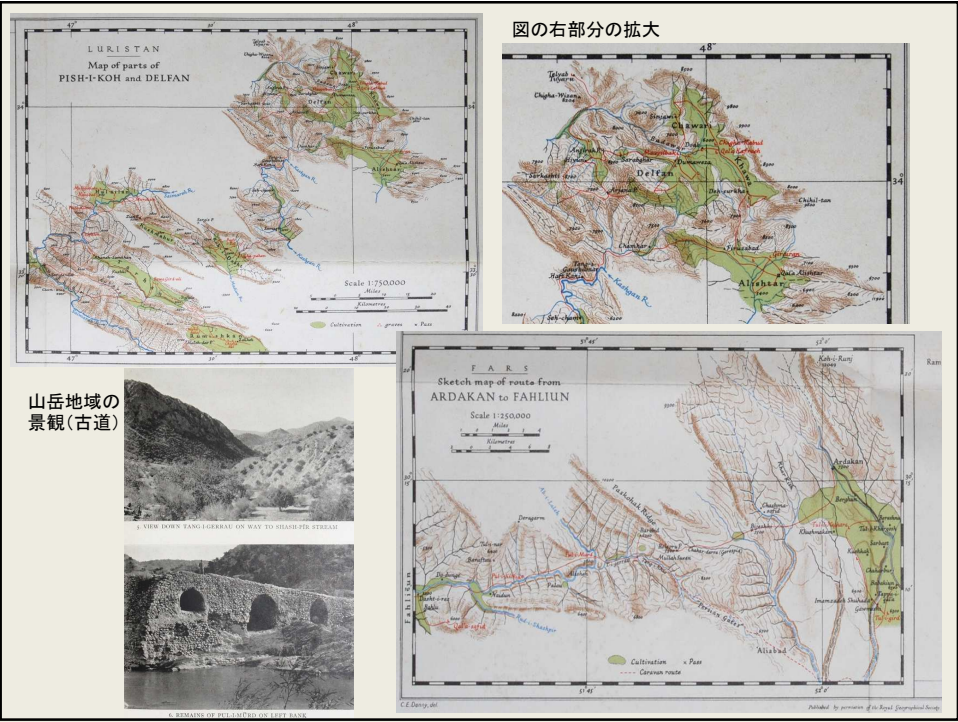
上は、同書にある**献呈の辞**
以下は、金子民雄さん訳による。

私のインドにおける人生の出発点は、私の努力をカづけ、進めて下さり、同情と援助を惜しまれなかった
前・パンジャブ総督
エドワード D. マクラガン卿
K.C.S.I., K.C.I.E に
この冒険的旅行記を、心からなる感謝の気持ちををもって謹呈いたします。

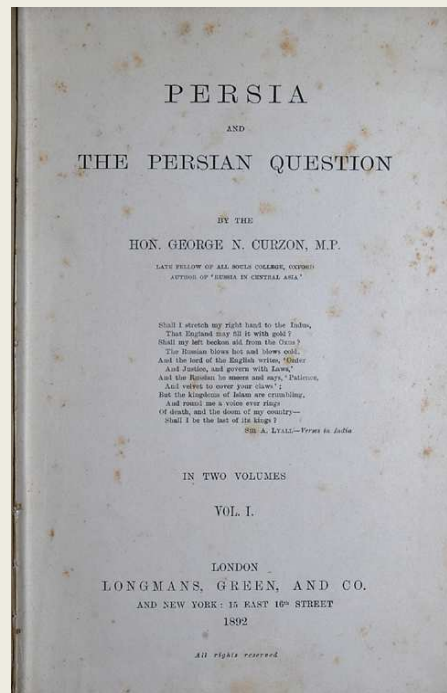
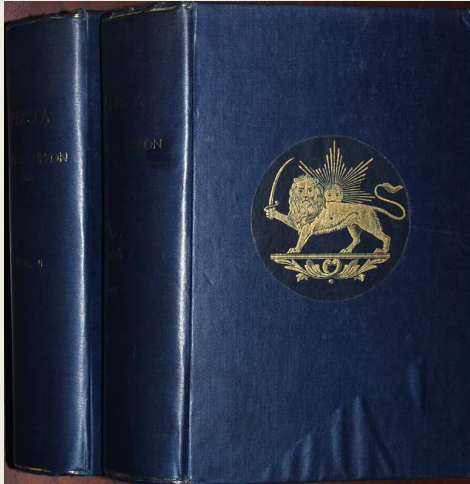
金子さんコメント：
スタインは英国人ではなかったので、英文の表現が大変むずかしくて(複雑)、訳にくいのです。



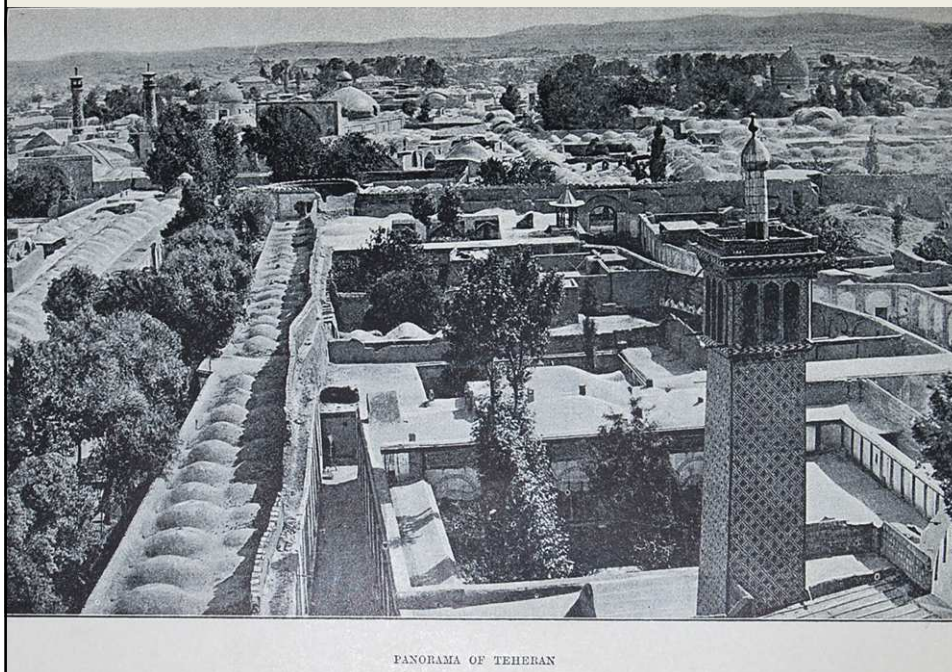


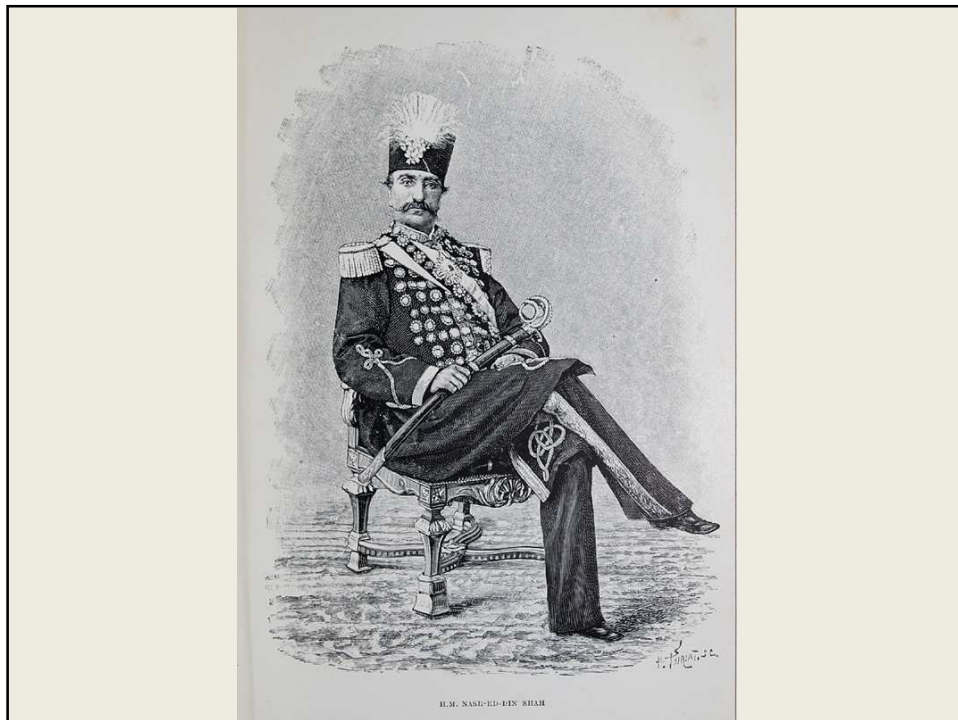
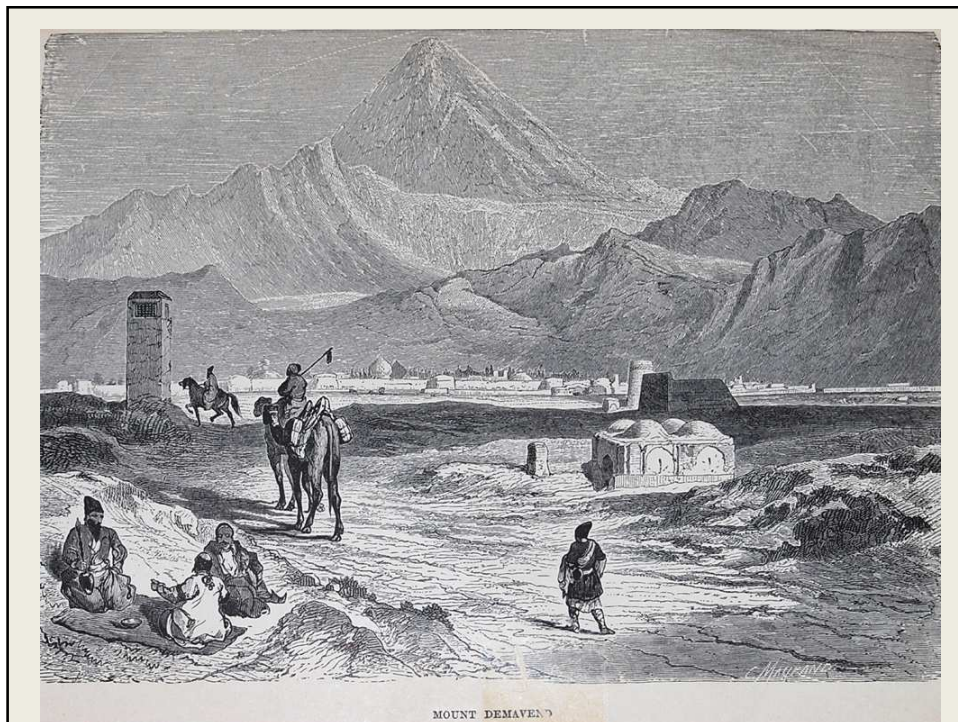


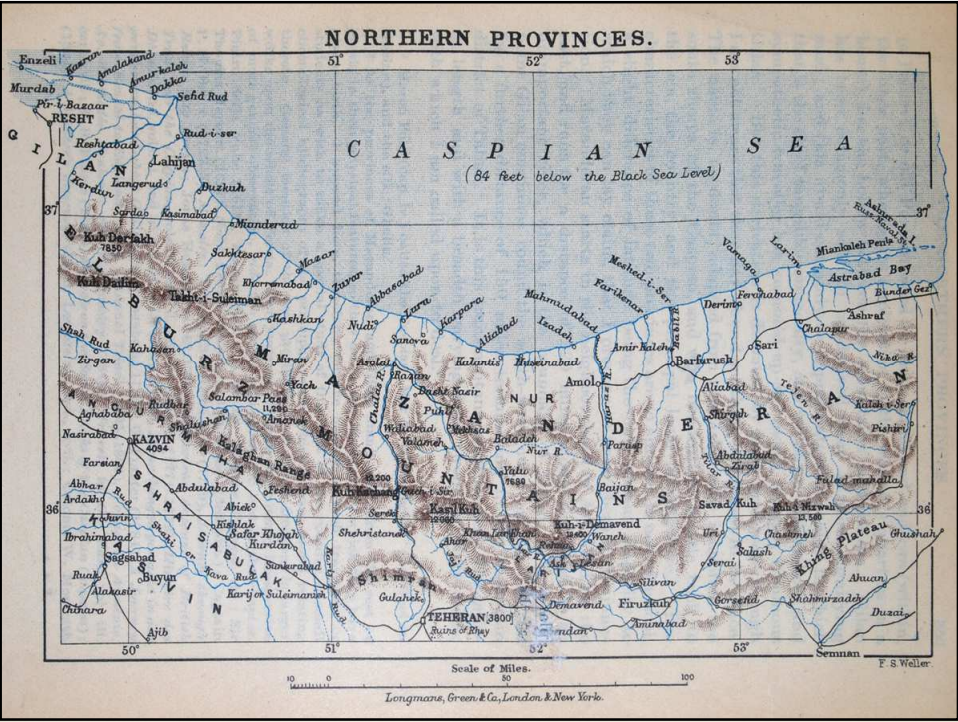
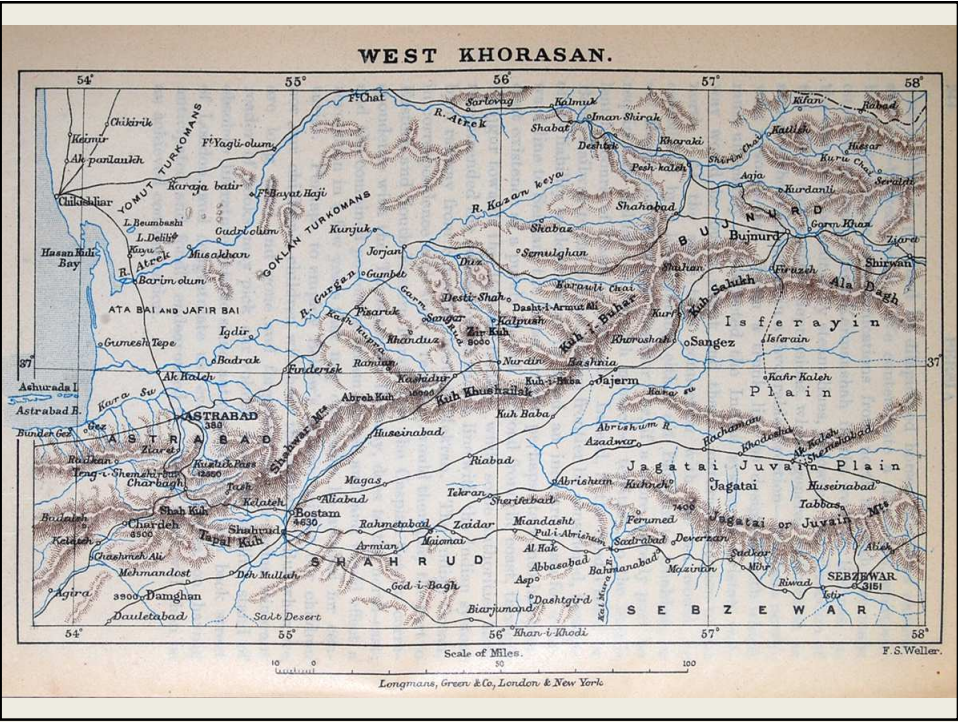
『 Persia and Persian Question. 』 Vol. I. II、
Hon. George N. Curzon, M.P.、1892



以下、同書より











続いて、金子先生 ご講演

19世紀のペルシアを旅したヨーロッパの旅行家たち

ー バンベリー、ヘディン、サイクス、スタイン、カーゾン と、
明治前期の日本人の旅行記を中心に

